

2008年度 修士論文

総合型地域スポーツクラブにおける
ソーシャル・キャピタルに関する研究

A Study on Social Capital of Comprehensive
Community Sports Clubs

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻 スポーツビジネス研究領域

5007A061-8

宮宗 大輔

Miyaso, Daisuke

研究指導教員： 木村 和彦 教授

総合型地域スポーツクラブにおけるソーシャル・キャピタルに関する研究

A Study on Social Capital of Comprehensive Community Sports Clubs

スポーツビジネス研究領域

5007A061-8 宮宗 大輔

指導教員 木村 和彦 教授

【序論】

文部科学省（以下、「文科省」と略す）によって、2000年度に公表された「スポーツ振興基本計画」は、「総合型地域スポーツクラブ（以下、「総合型クラブ」と略す）の全国展開」を掲げ、わが国のスポーツ人口拡大目標（10年間で、成人の週1回以上の実施率を50%以上）に不可欠な政策目標とした。

文科省によると、2008年7月の時点で、2768クラブが育成、もしくは準備中であるとし、総合型クラブの育成において量的な整備がされつつある。しかし、「たしかに、多くの総合型クラブが育成され、身近なスポーツ環境が整備されることは望ましいことである。しかし、総合型クラブ育成においては、量的な整備とともに質的な問題も問わなければならない」（行實,2007）という指摘のように、総合型クラブの育成においては、質・量の両側面からの整備・育成が必要である。

中西（2005）は、総合型クラブ育成の社会的機能に着目し、「ソーシャル・キャピタル（以下、「SC」と略す）」概念を援用することで、総合型クラブのコミュニティ形成機能の可能性について説明し、総合型クラブの質的成果として捉えることの必要性を示唆している。

総合型クラブの質的成果として、SC概念を援用する研究は存在するが、従来型の小規模で単一のクラブ（以下、「単一型クラブ」と略す）との比較による分析は行われてい

ない。また、行實・中西(2007)では、クラブ運営参加者は、橋渡し型 SC が高い傾向にあるとしているが、クラブへの参加はより多岐にわたり、多様な参加が考えられ、多様なクラブへの関与と SC の関係を分析する必要がある。

【研究目的】

以上の点を踏まえ、本研究は、①総合型クラブと単一型クラブの SC の比較から、その役割を明確にすること、②クラブへの関与形態による SC を検証すること、③総合型クラブと単一型クラブの結成型 SC と橋渡し型 SC の醸成・蓄積を比較し、その役割を検討すること、を目的とした。

【研究方法】

本研究は、都内にある総合型クラブ3クラブと、総合型クラブと同一地域で活動する単一型クラブで活動するクラブ会員を調査対象とした。調査期間は、2008年12月初旬から2009年1月初旬までの約1ヵ月間である。調査方法は、郵送法と留置法による質問紙調査を用いて行った。なお、総合型クラブは、郵送法と留置法を併用し、郵送法の場合は、クラブマネージャーに配布・回収・返送を依頼する形式で行った。また、単一型クラブはすべて留置法で行った。回収数は389部で、総合型クラブが277部（回収率92.3%）、単一型クラブが121部であった。

質問項目は、先行研究の検討から抽出した、個人属性の4項目、信頼の4項目、近隣でのつきあいの2項目、社会的な交流の

5 項目、社会参加の 3 項目、スポーツ活動の 6 項目、の計 24 項目であった。

【結果と考察】

本研究では、総合型クラブと単一型クラブでは、「信頼」「近隣でのつきあい」「社会的な交流」「社会参加」において、統計的に有意な差が見られ、総合型クラブが高い値を示した。さらに、「信頼」「近隣でのつきあい」「社会的な交流」「社会参加」の合成変数で「SC 指数」を算出し、その比較を行った結果、総合型クラブが高い値を示し、統計的に有意な差を示した。同一地域での比較の結果においても同様の結果となり、総合型クラブは単一型クラブよりも SC を醸成・蓄積していることが明らかになった。

次に、クラブへの参与形態の有無による比較を行った結果、「クラブ運営」「会議・会合」「イベント」「コミュニケーションの場」への参加者は、非参加者と比べ、「SC 指数」が高い傾向があり、統計的に有意な差が見られた。

そして、総合型クラブと単一型クラブの橋渡し型 SC と結合型 SC の比較の結果、総合型クラブは、橋渡し型 SC・結合型 SC の 2 つの SC において、高い値を示し、統計的に有意な差を示した。

以上の結果から、総合型クラブは、地域社会の SC を醸成・蓄積する場としての機能があることが考えられる。また、同一地域においても同様の結果が認められたことから、総合型クラブは、「信頼」「つきあい」「社会参加」を高める機能があると考えられる。

クラブへの関与形態による比較の結果から、クラブへの関与は、運営への参加のみ SC を醸成・蓄積するのではなく、多様な形

での参加が、SC を醸成・蓄積していると考えられる。

総合型クラブと単一型クラブの橋渡し型 SC と結合型 SC の比較の結果から、総合型クラブは橋渡し型 SC と結合型 SC を持つことが確認され、地域社会の中でのつながりを強化し、ネットワークや社会参加などを促進する可能性が示唆される。

【結論】

本研究から、①総合型クラブは単一型クラブより SC を醸成・蓄積している、②クラブへ関与している者は、そうでない者より SC が高い、③総合型クラブは、単一型クラブより結合型 SC と橋渡し型 SC を醸成・蓄積している、という 3 点が明らかとなった。今まで、理念的に語られることの多かった総合型クラブの質的成果について、定量的に明示することができた。

総合型クラブの地域社会での役割は、ネットワークやつながりを強化し、信頼や社会参加を促す機能が期待される。今後、地域で自立した総合型クラブは、地域社会を巻き込むネットワークのハブの役割が期待される。そのためにも、総合型クラブへの参与形式を多様化するような工夫をすべきであろう。

また、総合型クラブでは、クラブの非運営者であっても、多様な形式で参加する者は SC を醸成・蓄積している可能性があることから、多様な参加者を受け入れて活動し、工夫する必要があると考える。

今後、総合型クラブは、地域住民を何らかの方法で巻き込み、活動していくことが望ましい。そうした総合型クラブの質的成果を測る指標として、SC 概念を援用は有意義なものとなると考える。

目次

第1章 序論

第1節 問題の所在	1
第2節 研究目的	3

第2章 先行研究の検討

第1節 ソーシャル・キャピタルに関する研究	5
第1項 ソーシャル・キャピタルの定義と概要	5
第2項 結合型ソーシャル・キャピタルと橋渡し型ソーシャル・キャピタル	10
第3項 ソーシャル・キャピタルの意義と効果	12
第4項 ソーシャル・キャピタルの形成要因	14
第2節 経営学としてのソーシャル・キャピタルの研究	16
第3節 スポーツにおけるソーシャル・キャピタルの研究	17

第3章 研究方法

第1節 分析の視点	22
第2節 調査項目の検討	23
第3節 分析の手順	30
第4節 調査クラブの選定	33
第5節 研究の限界	34
第6節 調査の概要	34

第4章 地域クラブによるソーシャル・キャピタルの比較

第1節 調査対象の基本属性	37
第2節 調査結果	40
第3節 SC 指数の分析	40
第1項 信頼の比較	41
第2項 近所づきあいの比較	42
第3項 知人・親類・同僚とのつきあいの頻度の比較	43
第4項 スポーツ・スポーツ以外の趣味・娯楽の比較	44
第5項 社会参加の比較	45
第6項 社会的な交流指数の比較	46
第7項 つきあい指数の比較	46
第8項 ソーシャル・キャピタル指数の比較	47
第4節 クラブへの関与形によるソーシャル・キャピタル指数の比較	48
第5節 同一地域におけるソーシャル・キャピタル指数の比較	51

第6節	結合型ソーシャル・キャピタルと橋渡し型ソーシャル・キャピタルの比較	52
第7節	個人属性によるソーシャル・キャピタル指数の比較	54
第8節	小括	56

第5章 結論

第1節	総括	58
第1項	総合型クラブのソーシャル・キャピタル	58
第2項	クラブへの関与形態とソーシャル・キャピタル	59
第3項	総合型クラブの結合型ソーシャル・キャピタルと橋渡し型ソーシャル・キャピタル	59
第2節	実践的示唆	60
第3節	今後の課題	63

引用・参考文献・参考 URL 一覧

巻末資料

謝辞

第1章 序論

第1節 問題の所在

文部科学省は、1995年（平成7年）度から「総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業」を開始し、2000年（平成12年）度に出された「スポーツ振興基本計画」では、「総合型地域スポーツクラブの全国展開」がわが国のスポーツ人口拡大目標（10年間で、成人の週1回以上の実施率を50%へ）に不可欠な施策とした。2006年（平成18年）度に「スポーツ振興基本計画」は改定されたが、総合型地域スポーツクラブ（以下、「総合型クラブ」と略す）の全国展開は、引き続き政策の重要課題となっており、スポーツ人口の拡大目標達成に向け「2010年までに全国の市区町村に少なくとも1つは総合型地域スポーツクラブを育成する」という努力目標は引き続き示された。

文部科学省によると、2008年7月の時点で、2,768のクラブが育成、もしくは準備中にあるとし、総合型クラブ育成においては、量的な整備がなされつつある。しかし、「たしかに、多くの総合型クラブが育成され、身近なスポーツ環境が整備されることは望ましいことである。しかし、総合型クラブ育成においては、量的な整備とともに質的な問題も問わなければならない」（行實,2007）という指摘もあるように、総合型クラブの育成においては、量的・質的の両側面からの整備・検討が必要である。総合型クラブは、住民の主体的な運営が望ましいとされており、多くの住民に支えられて創られることによるコミュニティ形成（住民参加型地域づくり）が期待されている。

中西（2005）は総合型クラブ育成の社会的機能に着目し、「ソーシャル・キャピタル（social capital）（以下、「SC」と略す）」概念を援用することで、総合型クラブのコミュニティ形成（住民参加型地域づくり）機能の可能性について説明するとともに、クラブ会員のコミュニティ意識の変容を総合型クラブの「成果」として捉えることの必要性を示唆している。SC研究において、多大な影響を与えたPutnam(1993)は、「SCとは、人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、『信頼』『規範』『ネットワーク』といった社会組織の特徴」と定義した。中西（2005）は、SCを「信頼に裏打ちされた社会的な絆、あるいは豊かな人間関係を捉えた新しい概念」とし、その理論を住民参加型地域づくりの

基盤となるものとして捉えている。地域における社会組織の1つである総合型クラブには、コミュニティ形成機能が期待されるため、その源泉と期待される SC を醸成・蓄積する組織といえる。

近年、政治学をはじめ、社会学や経営学、公衆衛生学などの分野において、注目を集めている SC という概念が、スポーツ経営学の分野においても援用可能であると考え、総合型クラブ育成の質的な成果の一つとしてとらえようとする。総合型クラブは、多種目・多世代・多志向の会員の参加・運営によるクラブ事業である。一方、従来型のクラブはその対極と位置づけられる。SC は、クラブのコミュニティ形成の源泉として期待されるため、総合型クラブが組織として SC を醸成・蓄積すると考えられるが、総合型クラブを対象とした SC の調査研究報告はあるものの、多数のクラブを対象とした研究は数が少なく、課題が多く存在する。

行實・中西（2007）による総合型クラブの SC の研究では、総合型クラブの機能として結合型 SC と橋渡し型 SC（結合型 SC と橋渡し型 SC については、第2章で説明する）が存在し、総合型クラブによっても醸成・蓄積される SC にも違いがあるとしている。しかし、総合型クラブの機能として SC を分析することももちろん重要であるが、地域社会の中でスポーツを行うクラブは総合型クラブに限らず、従来からある単一で小規模のスポーツクラブで活動している場合も考えられる。総合型クラブで醸成・蓄積される SC をタイプ別に比較することは確かに重要であるが、単一種目で小規模のクラブと総合型クラブとで醸成・蓄積される SC を比較することで、総合型クラブの新たな価値を見出すことができるのではないかと考える。

また、行實・中西（2007）は、クラブ運営者と非運営者の SC の違いにも言及しており、クラブ運営参加者は地域に対する意識として設定した橋渡し型 SC が高くなる傾向にあるとしている。しかし、クラブへの参加の方法はクラブ運営参加者と非参加者による分類だけでなく、より多岐にわたる。クラブ運営者だけでなく、ほかの参加形態による分析も必要であると考えられる。

第2節 研究目的

以上のことを踏まえ、本研究では、SC の醸成・蓄積が期待される総合型クラブに関して、その現状を把握するとともに、小規模で単一型の地域スポーツクラブと比較検討を行うことで、SC の醸成・蓄積の差異や特徴について検討していくことを目的とした。具体的には、①総合型クラブと小規模で単一の地域スポーツクラブの SC を比較し、その役割を明らかにすること、②クラブへの参加形態による SC の検証をすること、③総合型クラブと小規模で単一の地域スポーツクラブという活動形態の違いから、結合型 SC ・橋渡し型 SC の醸成・蓄積を比較し、その役割を明らかにすること、3 点である。

なお、本研究においては、SC 研究の分野で最も影響力があったと考えられる Putnam の定義に従い、その SC の理論を主に援用し、分析を試みることにする。

【第 1 章 参考文献・参考 URL】

Putnam, R.D.(1993): 河田潤一訳 (2001) 哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造.NTT 出版.

中西純司 (2005) 総合型地域スポーツクラブ構想の将来展望：市民参加型「まちづくり」の可能性を求めて.福岡教育大学紀要,No.54,pp.63-76.

文部科学省 HP : <http://www.mext.go.jp/>

行實鉄平・中西純司 (2007) 総合型地域スポーツクラブのソーシャル・キャピタルに関する研究.日本体育・スポーツ経営学会第 30 回大会号,pp.49-50.

第2章 先行研究の検討

第1節 ソーシャル・キャピタルに関する研究

第1項 ソーシャル・キャピタルの定義と概要

ソーシャル・キャピタル (SC) を文字通り翻訳すると「社会資本」となる。ところが、日本で社会資本というと、道路や上下水道や鉄道やダムといった、人々の経済活動や生活を支える施設の総称のことを指す。しかし、経済活動や生活を支える基盤は、このような施設に限られたものではなく、ソフトウェア的な基盤も重要である。SC はソフトの側面に注目するもので、「人間のつくる社会的組織の中に存在する信頼、規範、ネットワークのようなソフトな関係」(宮川,2004) として捉えられる。それゆえ、これまで用いられてきた社会資本という用語とは区別して、社会関係資本(ないしは、社会的資本)と翻訳される。

しかし、SC の定義に関しては、コンセンサスが得られていない。この概念を Coleman(1990)は、「SC は単一の構成要素(entity)からなるものでなく、共通して二つの特徴を持つ多様な構成要素からなる。すなわち、それらの要素はすべての社会組織のある側面から形成され、そしてその組織の中にいる個人特定の行動を促進する、という特徴を持つ」と定義した。こうした概念がもつ多義性から、様々な分野で研究がなされている。

Coleman 以降に SC という概念が広く知られるきっかけとなったのが、Putnam の研究である。Putnam は「民主的な政府がうまくいったり、逆に失敗したりするのはなぜか」というテーマの下で、イタリアにおいて地方制度改革が行われた 1970 年代から 20 年に渡る調査を行い、同じ時期に生まれ同じ制度によって運営し始められた各地方の自治政府でも、行政パフォーマンスが良好な地域とそうでない地域があることを見出した。そしてそのような差が生じる原因について、各地域の社会・文化的な環境の違いから説明を試みた。

Putnam はまず、内閣の安定性、予算可決・執行、先進的な制度の導入などの 12 の指標をベースに制度パフォーマンス指標を作成・測定した。そしてその指標が主に、北部の州で高く、逆に南部の州で低いという結果を得た。この結果を説明するものとして、Putnam

は国民投票率、優先投票率、市民の自発的組織加入数、新聞購読率の4つを市民度指標として測定し、分析を行った。その結果、制度パフォーマンス指標と市民度指標の双方の間に一貫した強い相関が見られた。

このような分析から、市民共同体的な連帯のパターンを持っている北部の州では、行政パフォーマンスが良好であり、それは他者に対する一般的な信頼感、互酬性の規範、多くの自発的結社とそれらの水平的な関係性、これらを構成要素とするSCの蓄積によるものであると結論づけた。SCが蓄積されている北部の州の社会では、広範な社会問題に対して人々の自発的な協力を得られるため、社会的ジレンマ状況に陥ることを防ぐことができると想定されている。

また、これらの連帯のパターンは歴史的に形成され、自己強化的な力学を持つものとされている。制度パフォーマンスが良好な地域は同時に経済が発展した地域である。しかし、歴史的に見ると、北部地域に市民共同体的な社会関係が生まれた時期において北部地域の経済発展度は非常に弱く、またその後の経済発展度も歴史的に一定せず、時期によっては南部の州の方が経済発展度が強い時代がある。それに対して、北部の州に共和制の伝統に影響を受けた市民共同体的な連帯パターンがあること、また、南部の州では専制体制や封建制度に影響を受けた恩顧—庇護的な関係があることは歴史的に一貫している。このことから、Putnamは「経済発展→市民的文化」ではなく、「市民的文化→経済発展」というルートが妥当であると分析している。

SCの定義としては、Putnamの「人々の調行動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」という定義が広く知られているものの、表1-1に示すように、様々な定義が存在する。

表 1－1 様々な SC の定義

Putnam (1993)	人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる，信頼，規範，ネットワークといった社会組織の特徴
Fukuyama (1999)	信頼が社会全体あるいは社会の特定の部分に広く行き渡っていることから生じる能力
世界銀行 (2000)	SC とは，社会的なつながりの量・質を決定する制度，関係，規範である．社会的なつながりは経済の繁栄や経済発展の持続に不可欠である．SC は単に社会を支えている制度ではなく，社会的つながりを強くするための糊の役割を果たしているのである．
OECD (2001)	規範や価値観を共有し，お互いを理解しているような人々で構成されたネットワークで集団内部または集団間の協力関係の増進に寄与するもの
Baker (2001)	個人的なネットワークやビジネスのネットワークから得られる資源であり，情報・アイデア・指示方向・ビジネスチャンス・富・権力や影響力・精神的サポート・善意・信頼・協力
Woolcock (2000)	ソーシャル・キャピタルとは協調行動を容易にさせる規範・ネットワークである
Lin (2001)	特定目的の行為においてアクセスしたり，活用される社会構造の中に埋め込まれた資源
Burt (2005)	関係構造における個人の位置づけによって創造される利点

〈参考資料〉内閣府（2003）を参考に加筆

Kawachi(2006)は，公衆衛生学研究における SC の定義から，SC には大きく分けて，二つの考えがあるとした．一つ目の考え方は，SC を資源(resource)としてとらえるものである．これはたとえば，信頼，規範など，特定の社会集団が利用可能な資源としてのものである．また，社会集団は，職場，ボランティア組織，固く結束した住居地域の様に異なった形状をとりうるとされる．Kawachi はこれを「SC の『社会凝集性(Social cohesion)』を支持する人々の定義」とした．この考えの特徴は，SC を集団の特徴として概念化している点，である．つまり，組織や地域が持つ特徴であり，集団に属する個人が持つ特徴とは，

異なるということである。それゆえ、非協力的なメンバーが、社会的凝集性の高い組織に属する可能性もありうる。このことから、「SC の社会的凝集性を支持する人々による定義は、個人に影響を及ぼす集合的な影響、いわゆる『文脈(contextual)』効果に重点を置く」ものとしてとらえている。

もう一つは、Lin(1999)らの研究からみられるように、社会的凝集性とは別に、SC の「ネットワーク」理論にもとづく定義がある。「ネットワーク」理論に基づく定義では、「SC を人々の SC の中に埋め込まれたリソース、たとえばソーシャル・サポート、情報チャンネル、社会的信用などの観点から定義している」(Kawachi,2008)としている。ネットワーク論者は、ソーシャル・キャピタルを集団の特徴(ソーシャル・ネットワーク)としてだけでなく、個人レベルの特徴として、両者のレベルで概念化し、測定しようとしている。「ただし、たいていのネットワーク論者は SC を個人レベルと集団レベルの両方で同時に評価するのではなく、むしろ測定法に合わせてどちらかのレベルでのみ測定を試みる傾向にある」(Kawachi,2008)という指摘があるように、ネットワーク論者の中でも、両方を測定することはあまり行われていないのが現状のようである。こうした「ネットワーク」理論に基づく研究においては、Lin(2001)らの研究がある。個人の SC を測定する別のアプローチである Lin らの研究は、個人(エゴ;ego)に医者、弁護士、ロビイストのような影響力のある職にある人を自分のネットワークから挙げさせたり、助言や権威もしくは政治的つながりといったリソースを提供してくれる人を挙げさせたりするものである。

他のネットワーク論者たちは、ソーシャル・ネットワーク全体のマッピングを作ることによって SC を測定するアプローチをとっている。この方法は、ある特定の社会組織のすべての構成要素にアプローチすることから成り立っている。つまり、すべての構成要素間の関係性の有無やその特徴といったものを検討し、ネットワークの相関図を作ることによって説明する立場なのである。こうすることで、SC のもつ中心性や橋渡し(ブリッジング機能)のようないくつかの概念は、SC の実際の測定ではないにしても、それに直接かかわってくるものとなる。

Kawachi の指摘は、SC を個人の特性か集団の特性か、そのいずれかとみなすべきかと、ということである。さらに、SC の社会的凝集性アプローチでは、集団の特性として概念化しているが、ネットワーク・アプローチでは、個人レベルと集団レベルの両者を含んでいる。SC は、社会凝集性として概念化されるものであるのか、もしくはネットワークに埋め込まれたリソースとして概念化されるべきかと、ということである。これに対して、Kawachi は、

「個人の特性か集団の特性か、また、社会的凝集性の概念かネットワークのリソースとしての概念か、といった問題に対して、結論を出すための説得力のある議論を見出すことができない。SCの社会的凝集性にもとづく定義もそのネットワーク理論による定義も、価値ある資源(capital)が社会的関係の中に、また、その副産物として存在していることを指し示すことができるという利点を持っているからである」と、指摘する。

稲葉(2005)はこうした背景を踏まえてSCを、「心の外部性を伴った社会における信頼・規範・ネットワーク」と定義している。これは信頼・規範・ネットワークは人々の心に働きかけてはじめて意味を持つものであり、市場取引が生じていなくても、重要な役割を演じるということである。すなわち、豊かなSCの蓄積は、市場取引コストを低減する効果もあるということを示している。また、稲葉(2005)によると、SCをさらに定義を厳密に整理すると、信頼・規範などの価値観と、個人や企業との間の具体的な関係であるネットワークとの2つに分けることができるとしている。これによると、信頼・規範などの価値観は、社会や広範なグループに関するものである場合が多いが、それらは多くの場合、対象となるメンバー全体への信頼や規範であり、特定の個人に対する信頼・規範ではなく、こうした社会全般に対する信頼・規範などは、非排除性や消費の競合性といった「公共財」としての性質を持つとされる。その一方で、ネットワークは基本的に個人や企業などの間に存在するため、「私的財」としての性質を持ち、また、ネットワークが特定の規範と結びつくと、特定のメンバーの間だけで消費の非競合性としての「クラブ財」としての性質を持つとされる。

表 1-2 稲葉による SC の定義

私的財としての SC	個人間ないしは組織間のネットワーク
公共財としての SC	社会全般における信頼・規範
クラブ財としての SC	ある特定のグループ内における信頼・規範（含む互酬性）

稲葉(2005)

このような様々な先行研究を概観してみると、SCの研究においてはPutnamの定義から読み取れる「信頼」「(互酬性の) 規範」「ネットワーク」といった項目の検討が行われているが、SCを研究する場合、主体や視点を十分に意識する必要があるだろう。個が全体とし

でのネットワークを切り分けて、どのような価値を生み出し、それをいかに共有していくかについて考えていかなければならない。

第2項 結合型ソーシャル・キャピタルと橋渡し型ソーシャル・キャピタル

現在では、SC を結合型(bonding)と橋渡し型(bridging)に区別することの重要性に関しては多くの研究者が合意している (putnam,1993 : Gittell & Vidal,1998 : Szreter & Woolcock,2004 : kawachi,2006)。結合型と橋渡し型に関する明確な定義はなされていないが、Kawachi(2008)の定義を援用するならば、「結合型の SC とは、社会的アイデンティティ、たとえば、社会階級や人種といった点がメンバー内部において似ている (homophilous) 社会的グループ内でアクセスできるリソースのことを指す。これに対して、橋渡し型 SC とは、社会階級、人種などの社会的アイデンティティの境界を超えた人脈を介して個人やグループによってアクセス可能なリソースのことを指す」といった定義がなされている。こうした分類は、SC が与えている影響についての正の側面と負の側面とを理解するうえで有用であるとされている。

結合型 SC は社会の接着剤とも言うべき強い絆や結束によって特徴づけられ、内部志向的であると捉えられており、この性格が強すぎると「閉鎖性」や「排他性」につながる場合もあり得るとされる。これに対して橋渡し型 SC は、結合型に比べ、絆や結束はより弱くより薄い、より「開放的」「横断的」であり、社会の潤滑油ともいうべき役割を果たすとみられている。また多くの SC の議論において、どちらかと言えば結合型 SC よりも、「開放的」「横断的」な橋渡し型 SC が重要という主張が展開されている。

結合型 SC の良い影響は、結束力のある組織では、いざとなると $1 + 1 = 2$ 以上の力を発揮することもあるということである。さらには、強い信頼は取引コストを低下させる。強い信頼で結ばれた者同士では、わざわざ契約交渉に多大な時間を要することなく、取引を進めることが可能となる場合もある。後に予想されるリスクも協議の上、解決できるという前提があるからである。

一方、橋渡し型 SC は「異なる価値観」や「既得権を脅かす存在」を伸ばし、認めるということで「周りと協調しつつ、変化に柔軟に対応できる」といった影響を与える。ただし、

強い組織力といったものは醸成しにくくなり、マネジメント上では新たな課題が生まれる可能性も指摘される。

こうした SC の類型はクラブ財ないしは公共財としての性質を持つ SC の例として、結合型 SC は自治会・町内会等の地縁的な活動を担う組織、橋渡し型 SC はボランティア・NPO・市民活動を担う組織が主として有すると論じられることが多い。すなわち、自治会・町内会は、ある決まった範囲で固定化・高齢化した数人の役員によって、新しいメンバーの参加がないまま数十年も継続され、「閉鎖性」や「排他性」を持ちやすい。一方、ボランティア・NPO・市民活動団体は地域に捉われないテーマに応じて他団体と連携・交流しやすく、都合の良い時だけの参加も許容されやすい「開放性」や「横断性」を持ちやすいということである。もちろん、橋渡し型 SC の機能を地縁的な活動を担う団体が持っていないということを意味するものではなく、そうした性質が強いと考えられているということである。

SC の研究では、良い影響については強調する傾向があり、悪影響には軽視する傾向にある。その中、Portes(1998)は SC の負の側面について注意を促した。それは、(a) 凝集性の高い集団のメンバーからの、他者に対してサポートを提供するようにという過度の要求、(b) 多様性に寛大でないばかりか、個人の自由を制限しかねないほど規範に従うことが期待される、(c) 集団内の結束のために、集団外の人を排除する、極端な場合には虐げることもある、(d) あまりに緊密な集団内においては、社会的な出世の見込みを妨げてでも、メンバーを平均化してしまう規範がある、ということである。このように、SC は他のすべての形態の資本と同様に、良い結果にも悪い結果にも結びつきうるということである。

しかし、結合型と橋渡し型の区別をすることは、SC に関連する矛盾した効果について説明するうえで役に立つのである。Varshney(2002)は、インドにおける宗派間の暴力事件の勃発に関する実証研究を行っているが、ヒンズー教徒とイスラム教徒の住民比率が同じであっても、インドの都市全体での宗派間紛争には、歴史的にはばらつきがあることを指摘した。Varshney によれば、こうした結果に対して、平和な都市内部には橋渡し型の SC が存在するためであると説明する。この場合の橋渡し型 SC は、ビジネス集団、読書サークルなどの形態をとっており、そのメンバーにヒンズー教徒もイスラム教徒も含まれているものであった。宗派間の連絡経路を維持したり、暴動を扇動するために地域で流布された噂を効果的に否定したりすることなどによって、暴動の勃発をうまく制御していたとされる。

結合型 SC は貧困な地域の住民が生きていくための重要な関連を示している。アラバマ州

の貧困地域に居住するエスニック・マイノリティを対象にした Mitchell & LaGory(2002)の研究によると、高い結合型の SC は、逆説的ではあるが、高い精神的苦痛と関連していたと報告されている。さらに、人種や社会階級が自分と異なる人々と社会的つながりを持つ人は、精神的苦痛を訴える傾向が少ないという結果も報告されている。

このように、SC は信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴をもとに議論がなされるが、いくつかのタイプが存在し、それぞれについての良い面と悪い面を有している。また、ひとつの組織・社会の中においても結合型、橋渡し型の両タイプの SC は混在しており、多次元で重層的なものとなっている、ゆえに、SC は感覚的には理解できるが、実態的には捉えどころがないもの、といった印象を与えていることもある。

総合型クラブの場合であれば、結合型 SC と橋渡し型 SC の両方の機能を兼ね備えている可能性があると考ええる。総合型クラブの特徴は、中学校区程度の範囲の多様な特徴をもった住民で構成される多種目・多世代型のクラブで、活動拠点を持ちながら会員の自主的な運営によって営まれるクラブであるといわれており、地域社会の交流を促進する役目を持ちながら、ボランティア・NPO などの活動の場としても機能していると考えられるためである。

第3項 ソーシャル・キャピタルの意義と効果

米国社会を対象にした Putnam(2001)は、各州間の SC 比較が行われているが、そこでは人々の市民参加と社会関係資本について、過去 30 年ほどの間にどのように変化したのかについての分析がなされている。1980 年から 1993 年の間に米国内のボウラー総数は 10%増えたにもかかわらず、リーグボウリング会員数は 40%減少した。また、参加している人でもレーンに備え付けのテレビを見ながらプレーし、仲間との会話の時間が減っている。

この中で Putnam は、政治参加、市民参加、宗教参加、職場でのつながり、インフォーマルな社会的つながり、ボランティア・慈善活動といった様々な分野について、多くのデータを引き合いに出しながら、米国における社会関係資本の低下について論じている。Putnam によれば、米国の SC を減少させた主な原因は 4 つある。①賃金の低下とそれに伴う共稼ぎ世帯の増加、それによる家庭内および家庭と地域の交流の減少、②TV の普及等に

よる余暇時間の私化とそれによって受動的な生活態度が育成されたこと、③郊外化によって通勤時間が増加し、人種・経済的に棲み分けが生じたこと、④参加や信頼の高い戦中世代から個人主義的・消費主義的価値観をもった戦後世代への世代交代、である。

Fukuyama(1999)も同じような立場に立った現代社会論を展開している。犯罪発生率の増大、出生率の低下、離婚率の上昇、信頼の低下といった現象についてデータを示しながら、工業化社会から情報化社会に移行する際の社会秩序の崩壊と再構築について論じている。

Kawachi(2002)は人々の健康・幸福状態が自身の所得水準だけでなく他の人の所得水準にも依存し、先進国のなかでも経済格差が拡大すると相対的貧困層が生まれてしまうという相対所得の仮説から、現代社会の人間関係と健康への影響について論じている。Kawachiも議論の中でSCに言及しているが、行きすぎた消費・競争社会が格差を生み、格差の拡大がSC・社会の連帯を損ない、結果として人々の健康や幸福を損なう、という流れでSCの説明をしている。

わが国の、内閣府(2005)の「コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタル」では、一定水準以上の富裕化、家族機能の崩壊、地域内での生活時間そのものの減少、携帯電話等の普及といった原因を挙げ、人とふれあう機会の減少や人間関係の希薄化という状況を生み出していると論じている。

このようにSCは様々な分野での効果があることが報告されているが、OECD(2001)の報告内容の中に、健康面、教育面、治安面、経済面の4点にまとめられている。

一つ目に健康面での利点である。社会的なネットワークを持つことにより、孤立感によるストレスを減らし、認知症やアルツハイマーなどの精神疾患を予防し、日常的に様々な支援を受けることが出来ること、また他者とのかかわりを持つことができるために主観的幸福感が高まる傾向があることなどの良い影響がある。このほか、人々の健康状態はそれぞれの個人が持っているSCと密接な関係があるという実証研究が多く存在する。これは、意思の疎通するネットワークがあると、ストレスそのものにさらされることが少なく、ストレスを感じてもそれを緩和することができるし、ストレスの対処方法の理解も行き届くからだとされている。

二つ目には教育面での効果である。児童の育成に対して近隣の相互扶助を受けることができ、母親の教育活動上の負担を軽減することができること、また、それゆえに児童虐待を防ぐことができること、子どもは社会とのつながりを持つことで成人生活への移行を円滑に行うことができること、読み書き等コミュニケーション能力が高まるなど教育の質を

向上することができることなどの点である。Putnam によるアメリカの州別ソーシャル・キャピタル・インデックスも州別の学業成績と極めて相関が高い結果となっている。

三つ目には治安面で、SC の高さと犯罪発生率の低さとが相関関係にあることが注目される。SC は、個人に対しては利己的な行動を控える価値観を育て、犯罪や暴力を抑制する監視機能を果たしていると想定されている。

四つ目には経済面に対する影響である。SC を豊富に蓄積することによって企業及び組織内の人々の協力を促し、生産性を向上することができる。またその企業及び組織がより大きな生産単位に成長することが可能となる。市場では取引コストが低く済むために、取引が活発になり、企業間、企業と消費者など経済主体間の協力が容易になる。また情報の流通が増え、個人や企業及び組織の学習の機会が多くなる。また様々な情報を組み合わせることができるために、例えば、アメリカのシリコンバレーのように、ベンチャー企業間でのフォーマル・インフォーマルの水平的な協力のネットワークが技術革新の促進を導くといったことが指摘されている。

以上のように、期待する経済的・社会的成果によって、異なるタイプの SC が必要であるとみられているが、SC は独自の発展や創造的な活動の間われる時代において、新たな地域経営のための資本として注目されている。

第4項 ソーシャル・キャピタルの形成要因

SC は、家族、仲間、職場などの社会グループに共有されるものであり、様々な社会グループにより、形成されるものである。そこで、ソーシャル・キャピタルの蓄積の源泉・要素として、OECD(2001)では、(1)家族、(2)学校、(3)地域コミュニティ、(4)企業、(5)市民社会、などを挙げるとしている。

例えば、家族は、規範や社会的つながりを生む SC の基礎的な構成要素である。学校も、共同生活の場であり、共同、協働の価値観が育成される。特に高等教育機関や大学、職業訓練機関などでは、様々な社会的グループが交わり、出会いの場となり、横断的なネットワークができるとされている。近隣居住地域も、隣人関係などを通じて地域コミュニティのネットワークをつくる。さらに企業も、例えばシリコンバレーに代表されるような研究

者のネットワークを形成する場となる。これらの活動によって、SCの量と質が影響を受けると考えられるが、SCに関する最近の分析対象として、ボランティア団体や市民団体の役割に関心が寄せられている。

他方、SCは、長い歴史の中で継承してきた文化や行動規範の産物でもあるという見方もされる。OECD(2001)は、世界価値観調査でみた信頼感のレベルには、各国間で大きな差異がみられるが、その国別の違いは時間が経っても比較的一定であり、また近隣諸国などでは似通った一つのグループを形成する傾向があることがみてとれ、地域的な文化圏で歴史の積み重ねによる信頼感の形成が示唆されるとしている。また、Putnamが行ったイタリアの地域比較研究では、SCの形成の違いの背景に南北イタリアの長年に渡る歴史的な違いがあると指摘された。このように、地域のSCは、歴史・文化の要因によって形成される部分があり、また長期にわたって安定している可能性があるとされる。

Putnamは、SCの源泉の一つとして、市民社会の重要性を指摘する。市民社会は、政府や市場から独立して行動するグループや自発的な組織からなる。Putnamは、スポーツクラブ、文化協会、協同組合、共済組合、労働組合など、人々が顔を合わせて活動を行うグループの重要性が強調される。また、このような組織が、結合型SCと橋渡し型SCの蓄積に重要な役割を果たすと論じている。特に、自発的な組織に属する個人は、他人を信頼する傾向が高く、幅広いコミュニティに参加する傾向があるとされている。

Putnamは、SCと市民活動の関係について、かつての公民権運動・女性運動などの社会運動はSCを創出し、SCを運動成功のための資源として活用していると説明している。ただし、NPOの中でも、メンバーが直接顔を合わせて参加することがあまりない大規模な組織体や、実質的・継続的な草の根の参加とはいえない住民投票運動や抗議デモなどはSCを創出する上で意味がないとしている。ボランティアにおいては、社会的地位と相関関係にあり、社会的地位が高い人ほどボランティア活動に参加する傾向があるため、市民活動がSCの偏在をもたらす可能性を指摘するものもある。

SCの形成要因について、分析レベルによって議論があるが、本研究が対象とする地域のコミュニティレベルでの地域のスポーツクラブ研究においては、Putnamがいう市民社会での活動をSCの源泉として捉えることとする。

第2節 経営学におけるソーシャル・キャピタルの研究

SCというのは、さまざまな経済社会現象をネットワーク構造という視点から解き明かすことができる汎用性の高い分析である（安田,2001；金光,2003）とされている．経営組織論の分野でも、近年、急速に研究が蓄積されつつある（Adler and Kwon, 2002）．日本においても少しずつではあるが研究が蓄積されており（安田・鳥山,2007；金光,2007；山田ほか 2007；中野,2007），サプライヤーの研究分野でも一定の成果が上げられている（若林,2006；西口,2007）．サプライヤーの分野では、個々人というよりもサプライヤーや組み立てメーカー、あるいはサプライヤー同士の法人間のネットワークが議論の対象になっている．

結合型 SC・橋渡し型 SC という議論についていえば、企業ネットワークレベルを対象とした西口の研究がある．西口（2007）は、コミュニティ内の緊密な結びつきを「近所づきあい」として、逆に、コミュニティ間を橋渡しするような結びつきを「遠距離交際」として表現し、両者の間に適切な比率があると述べている．つまり、近所づきあいだけのネットワークは情報伝達の面で冗長であり、求める情報にたどり着くまでのステップ数が多くて問題解決の面で最適とはいえない．逆に、遠距離交際だけのネットワーク構造も安定的に情報を伝播できず、全体としてみれば非効率になるというデメリットがある．

西口（2007）は、Burt(2001)や Watts(2003)の分析結果なども踏まえて、パレートの法則に準じるような適切な比率（近所づきあい：遠距離交際＝8：2）があると推論している．この推論は、「弱い紐帯の強さ」（Granovetter, 1973）や Burt(2001)の議論に依拠したものである．そして、西口（2007）は、この組み合わせが現実世界でいかに有効に機能するかが、トヨタのサプライヤーネットワークをもとに例証されている．トヨタのケースでは、「遠距離交際」と、その成果を近隣に波及させる「近所づきあい」のネットワーク全体のバランスが備わっていたため問題解決することができたとしている．

経営組織論の分野では、SC をネットワーク理論の立場から研究するものが主である．これは、信頼や互酬性の規範といった、Putnam の主張する SC の要素が、経営組織論では成果として評価されないからであると考ええる．Putnam の視点での SC の分析は、コミュニティ形成の源泉としての SC という意味合いが強く、経営学のような企業や個人のレベルを分析する際には、ネットワーク理論からの分析が、有効な分析方法といえる．

けれども、以上のように SC の視点での分析は、経営学の分野に新たな知見を得られる可能性が考えられる。

第3節 スポーツ分野におけるソーシャル・キャピタルの研究

SC に関する研究は、近年、スポーツの分野でも研究が蓄積されつつある。スポーツと SC の研究は、前場・野崎（2005）、小林・原田（2006）、行實・中西（2007）、長積ら（2006）などが見受けられる。前場・野崎（2005）の研究は、地域のスポーツクラブを核としたネットワーク形成の影響を調査し、「つきあい・交流」といった、近所つきあいの活動が、その地域のボランティア活動のような新たな価値観を共有させ、コミュニティネットワークの形成に寄与するとしている。小林・原田（2006）の研究は、SC と地域社会における運動・スポーツ活動参加状況の関係を測定しており、地域社会において、運動・スポーツ活動のみに参加するものよりも、運動・スポーツ活動とそれ以外の地域活動を行う者の方が、SC 指数が高くなる傾向にあるとしている。行實・中西（2007）の研究では、総合型クラブを対象に、クラブ会員の SC 指数を測定している。総合型クラブにおいては、結合型 SC と橋渡し型 SC が形成され、クラブ運営参加者は、橋渡し型 SC の指数が高くなる傾向にあった。長積ら（2006）の研究は、SC 研究の歴史的な変遷をたどり、SC の測定と方法論上の課題と明確にしたうえで、これからのスポーツ振興と SC の相互補完的關係についての探究は意義深いものになるとしている。

また、過疎農村地域を対象とした、斎尾・宮川（2006）の研究では、多くのネットワークを形成するようなスポーツ組織を「スポーツネットワーク」と定義し、過疎農村地域におけるスポーツクラブの機能的な側面に着目した分析を行い、スポーツ組織によるネットワークの構築が、地域づくりを積極的に意識させる傾向があるとしている。これは、スポーツ組織が地域のネットワークとして機能することを意味するものであると同時に、こうしたスポーツ組織をネットワークの分析対象と捉える可能性を示唆するものである。このように、スポーツの分野においても SC の研究が行われており、総合型クラブなどの地域のスポーツクラブの機能的な側面に着目した研究の蓄積がある。SC に関する研究の動向としては、スポーツ活動やクラブ活動によるコミュニティ形成機能の源泉として捉えられ、ス

スポーツ活動が人々の信頼やネットワークに良い影響を与えるものとして捉えられる研究が多くみられる。

これまでの総合型クラブの研究では、コミュニティ機能に関して「地域性(locality)」と「コミュニティ感情(community sentiment)」という2つの特性によって特徴づけたマッキーバー（1975）のコミュニティ論の視点で研究されることが多い。しかしながら、Putnamの主張するSCを源泉としたコミュニティ形成の機能としての研究は、近年、スポーツ経営学の分野でも注目されるようになってきている。

スポーツ経営学も経営学の分野と同様に、SCの視点に立った研究は、新たな知見が得られる可能性が考えられる。

【第2章 参考文献】

- Adler, P. S. and S. W. Kwon (2002) Social Capital. *Academy of Management Review*, Vol.27, pp.17-40.
- Baker,W.: 中島豊訳(2001)ソーシャル・キャピタル.ダイヤモンド社.
- Burt,R(2005)Brokerage & Closure: An Introduction to Social Capital, Oxford University Press.p4.
- Coleman,J.S.(1990)Foundations of social theory. Cambridge,MA: Harvard University Press.
- Fukuyama,F(1999):鈴木主税訳 (2000) 大崩壊の時代: 人間の本質と社会秩序の再構築 (上) (下) .早川書房.
- Gittell,R. & Vidal,A.(1998)Community organizing: Building social capital as a development strategy. Thousand Oaks, CA: SAGE Publications.
- Kawachi, I. & Kennedy, B. P.(2002):西信雄・高尾総司・中山健夫監訳 (2004) 不平等が健康を損なう. 日本評論社.
- Kawachi, I.(2006)Commentary: Social capital and health: Making the connections one step at a time. *International Journal of Epidemiology*, 35(4), pp.989-993.
- Kawachi,I. ,Subramanian,S.V.& Kim,D. (2007) : 藤澤由和・高尾総司・濱野強監訳 (2008) ソーシャル・キャピタルと健康. 日本評論社.
- Lin,N (2001) Social Capital: A Theory of Social Structure and Action. Cambridge University Press.
- Mitchell, C.U. & LaGory, M.(2002)Social capital and mental distress in an impoverished community. *City & Community*, 1,pp.195-215.
- OECD (2001) 人的資本及び社会的資本の役割.
- Pores,A. (1998) Social capital: Its origins and applications in modern sociology. *Annual Review of Sociology*.24.
- Putnam,R.D (1993) :河田潤一訳 (2001) 哲学する民主主義: 伝統と改革の市民的構造.NTT出版.
- Putnam,R.D (2000) :柴内康文訳 (2006) 孤独なボーリング: 米国コミュニティの崩壊と再生.柏書房.

- Szreter, S. & Woolcock, M.(2004)Health by association? Social capital, social theory, and the political economy of public health. *International Journal of Epidemiology*, 33(4),pp.650-667.
- Varshney, A.(2002)Ethnic conflict & civic life. Hindus and muslims in India. New haven, CT: Yale University Press.
- Woolcock,M. (2000) The place of social capital in understanding social and economic outcomes. *The World Bank*. p5.
- 稲葉陽二 (2005) ソーシャル・キャピタルの経済的含意：心の外部性とどう向かい合うか. 計画行政,日本計画行政学会,第 28 巻第 4 号,pp.17-22.
- 金光淳 (2003) 社会ネットワーク分析の基礎.勁草書房.
- 金光淳 (2007) 双対ソーシャル・キャピタルに注目した日本の取締役兼任ネットワーク進化プロセスの解明.組織科学,第 40 巻第 3 号,pp.33-40.
- 小林和子・原田宗彦 (2006) 日本体育・スポーツ経営学会第 29 回大会号.pp.51-52.
- 斎尾直子・宮川大介 (2006) 過疎農村地域におけるスポーツネットワークを通じた地域づくりに関する研究.農村計画誌,第 25 号,pp.299-304.
- 内閣府 (2003) ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて.独立行政法人国立印刷局.
- 内閣府経済社会総合研究所編 (2005) コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書.
- 中野勉 (2007) 巨大産業集積の統合メカニズムにつちえの考察—社会ネットワーク分析からのアプローチ—.組織科学,第 40 巻第 3 号,pp.55-65.
- 長積仁・榎本悟・松田陽一 (2006) スポーツ振興とソーシャル・キャピタルの相互補完関係：ソーシャル・キャピタル研究の視座と可能性.徳島大学総合科学部人間科学研究,第 14 巻,pp.9-24.
- 西口敏宏 (2007) 遠距離交際と近所づきあい：成功する組織ネットワーク戦略.NTT 出版.
- 野沢慎司監訳 (2006) リーディングスネットワーク論：家族・コミュニティ・社会資本関係. 勁草書房.
- 前場裕平・野崎武司 (2005) 日本体育・スポーツ経営学会第 28 回大会号.pp.25-26.
- マッキーバー, R. M. : 中久郎・松本通晴訳 (1975) コミュニティ.ミネルヴァ書房.
- 宮川公男・大守隆編 (2004) ソーシャル・キャピタル.東洋経済新報社,pp.3-54.

安田雪（2001）実践ネットワーク分析―関係を解く理論と技法.新曜社.

山田仁一郎・山下勝・若林直樹・神吉直人（2007）高業績映画プロジェクトのソーシャル・

キャピタル：優れた日本映画の「組」はどのような社会ネットワークから生まれるか？.

組織科学,第 40 巻第 3 号,pp.33-40.

行實鉄平・中西純司（2007）日本体育・スポーツ経営学会第 30 回大会号.pp.49-50.

若林直樹（2006）日本企業のネットワークと信頼―企業間関係の新しい経済社会学的分析.
有斐閣.

第3章 研究方法

第1節 分析の視点

ソーシャル・キャピタル（以下、「SC」と略す）の概念には抽象的なところが多分にあり、その測定手法も確立されているわけではない。OECD(2001)は、SCの測定基準の原則として、次の2つを指摘している。それは、(1)重要な要素（ネットワーク、価値観及び規範）の対象範囲ができるだけ包括的であることと、(2)態度や主観的な要素（例えば、信頼感）と行動面の要素（例えば、団体への参加、社会的な結びつきの程度）との間のバランスが取れていることである。SCを測定した代表的な例としては、Putnam(2004)がアメリカの州別に計算したものがある。ここでは、国民投票への参加度、新聞購読率、結社数の指標に基づく28の「市民共同体」の合成指数や、社会的信頼および市民活動や政治活動への参加を代表する14の指標からなるソーシャル・キャピタル・インデックスという合成指標が援用された。

このほか、Hall(1999)は、フォーマル・インフォーマルの社交性のネットワーク及びこれらに関連する社会的信頼の規範を重視し、性別・学歴・社会階級などの社会的属性別に結社への参加・信頼度を測定した。個人のSCを測定する別のアプローチである、Lin(2001)らの研究は、個人(エゴ;ego)に医者、弁護士、ロビイストのような影響力のある職にある人を自分のネットワークから挙げさせたり、助言や権威もしくは政治的つながりといったリソースを提供してくれる人を挙げさせたりするものであり、こうした個人のネットワークからアプローチするものもある。

一方、Fukuyama(1999)は、以上の研究のようにSCのプラスの価値を測定するのではなく、犯罪や家族崩壊などの社会の機能不全を測るための伝統的な指標を利用して、SCの欠如を測定することでSCを分析した。

わが国におけるSCの定量的な研究として、山内（2003）の過去の統計を加工した「都道府県別市民活動インデックス」や、内閣府（2003）におけるアンケート調査による把握が代表的なものとされている。そのほかにも、健康格差とSCの関係性を個人レベルの特性ではなく、集団レベルの特性や環境要因から把握していくという考えから、市田ら（2005）

や藤澤ら（2007）がマルチレベル分析という手法を活用し始めている．また，SC の視点から地域活性度を測定し，安全・安心といった信頼感の関係性を把握する立木（2008）の研究や，NPO と地縁組織を対象とした金谷（2008）の研究がある．

本研究では，SC においてこうした様々な要素の研究がある中で，「ネットワーク」「信頼」「規範」といった Putnam の定義を踏まえた内閣府の調査に基づき，調査項目を設定した．ネットワーク理論に基づく，Lin(2001)の研究や，Burt（2000），西口（2007）のようなネットワーク構造の把握からの分析アプローチでは，総合型クラブの研究で挙げられている，コミュニティの源泉としての SC の把握はできないと判断したからである．そこで，内閣府（2003）の調査を参考に調査項目の検討を行った．

第2節 調査項目の検討

Putnam の定義する SC は，「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる，信頼，規範，ネットワークといった社会組織の特徴」である．したがって，SC の構成要素は，「信頼」「規範」「ネットワーク」であると考えられる．本研究は，この 3 要素を測定することで，SC を分析しようとするものである．

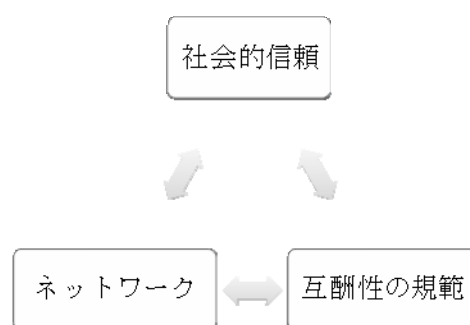


図 3-1 SC の概念イメージ

SC の構成要素について議論はあるだろうが，ここでは Putnam によって示された，「信頼」「規範」「ネットワーク」の 3 つの視点を踏まえている内閣府の調査を参考とした．内

内閣府（2003）では、①「ネットワーク」に対応するものとして、近隣での付き合いや社会的な交流を捉えた「つきあい・交流」の要素、②他人に対する一般的な信頼と特定の人を対象とした相互信頼・相互扶助を捉えた「信頼」の要素、③「規範」のうち互酬性の規範のあらわれとして社会的活動への参加を捉えた「社会参加」の要素、を SC の構成要素としてとらえ、分析している。内閣府（2003）の調査では、個人を対象として定量的な把握を試みる場合、結果として以下の 3 つの側面を捉えることとなるとしている。それは、①信頼の要素は「一般的な信頼」「見知らぬ土地での信頼」の 2 つ、②つきあい・交流の要素は「近所でのつきあい」「友人・知人とのつきあい」「親戚・親類とのつきあい」「職場の同僚とのつきあい」の 4 つ、③社会参加の要素は「地縁活動の参加状況」「スポーツ・趣味・娯楽活動への参加状況」「NPO・ボランティア活動への参加状況」「その他の団体活動への参加状況」の 4 つ、を Putnam の定義する SC の要素ととらえ、分析している。

これを図示したものが、図 3-2 および、表 3-1 である。

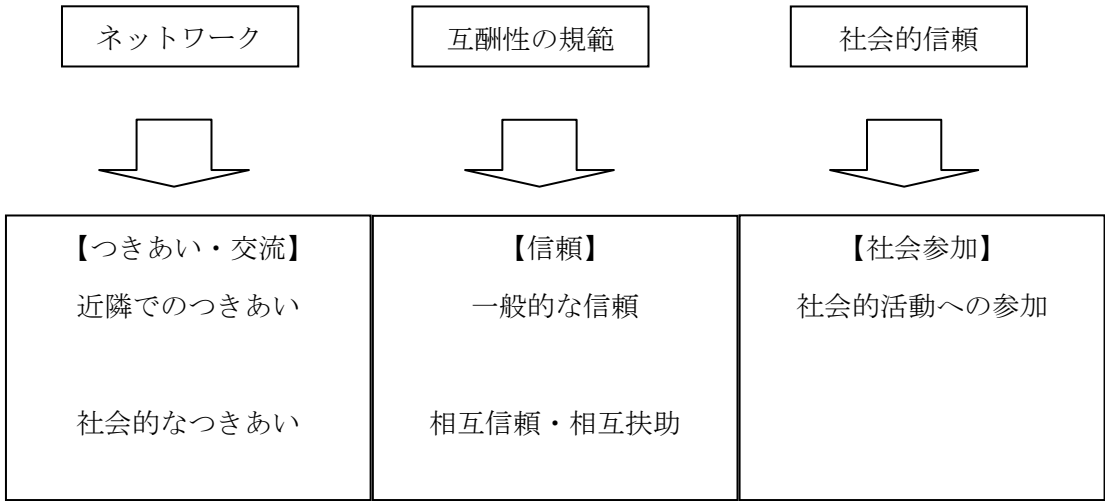


図 3-2 想定する SC の構成要素

〈資料〉内閣府(2003)より

表 3-1 内閣府の調査における SC の測定指標

SC 指数	指標	アンケート調査の設問項目
信頼指数	一般的な信頼	一般的な信頼
	相互信頼・相互扶助	旅先での信頼
つきあい指数	近隣でのつきあい	近所つきあいの程度
		近所つきあいのある人数
	社会的な交流	友人・知人との学校・職場外でのつきあいの頻度
		親戚とのつきあいの頻度
		スポーツ・趣味・娯楽活動への参加状況
		職場の同僚との付き合いの頻度
社会参加指数	社会参加	地縁的な活動への参加状況
		ボランティア・NPO・市民活動への参加状況
		その他の団体活動への参加状況

〈資料〉内閣府（2003）より

しかしながら、「信頼」についての具体的な質問項目については、ワーディングや尺度に多少の違いが見られる。そこで、内閣府の設定する「信頼」の質問項目に加え、高齢者の健康と SC に関する研究を行った市田ら（2005）の用いた指標を追加した。これは、市田ら（2005）の研究が、大規模で、かつ尺度の信頼度も高いことがうかがえると考え、採用することとした。この研究では、認知的変数に「信頼」・「規範」の変数を採用している。内閣府（2003）では 2 項目のみで測定している「信頼」の項目に、より多面的で包括的な解釈を加えるため、市田ら（2005）の研究を参考に、認知的変数の「互酬的規範」と「他者への不信」を追加することとした。なお、「互酬的規範」は「一般的信頼」の項目に、「他者への不信」は「相互信頼・相互扶助」の項目へそれぞれ追加した。

さらに、本研究は、地域のスポーツ活動における組織形態の違いを調査することとしているため、内閣府（2003）の調査で「社会的な交流」を構成する項目である「スポーツ・趣味・娯楽への参加状況」の質問内容を、「スポーツへの参加状況」の項目と、「趣味・娯楽活動への参加状況」を別項目として測定した。また、行實・中西（2007）の研究では、クラブ運営参加者が、「橋渡し型 SC」として設定した「地域に対する意識」が高い値を示

すことが報告されている。そこで、本研究においても、「クラブへの関与」の質問を設定した。本研究で設定した質問項目は、「運営への参加の有無」「会議・会合などへの参加の頻度」「イベントなどへの参加の頻度」「スポーツ以外のコミュニケーションの場への参加の頻度」の4項目を設定した。この質問項目により、クラブへの関与の仕方によるSCの違いを測定しようと試みた。

そして、SCは結合型(bonding)と橋渡し型(bridging)があり、本研究では、2つのSCについても測定を試みることにした。これは、スポーツ振興基本計画で推奨される総合型クラブが、中学校区程度の範囲を基本としながら、地域のコミュニティ形成の基盤として期待が寄せられていると考えたからである。NPOと地縁組織を対象とした金谷(2008)の研究では、NPO組織と、従来からある地縁組織を比較し、治安・少子化対策、雇用、信頼、互酬性の項目は、地縁組織の数が多い方が有意に良い影響を与えていた。一方、健康や、教育といった分野では、NPO組織が多い方が有意に良い影響を与えている。従来の地縁組織をもとにNPO法人の取得なども目立ってきた、総合型クラブは、結合型SC・橋渡し型SCの両機能の醸成・蓄積に寄与すると想定したからである。

本研究では結合型SCについては、近所つきあいの程度と、地縁的な活動状況をボンディング指数として測定を試みることにした。Kawachiの定義では、結合型SCは、「社会的アイデンティティ、たとえば、社会階級や人種といった点がメンバー内部において似ている(homophilous)社会的グループ内でアクセスできるリソースのこと」としている。総合型クラブが地域社会での活動であることを想定した場合、地域社会の活動と、近隣住民とのつながりが結合型SCであると仮定した。

これに対して、橋渡し型SCは、「社会階級、人種などの社会的アイデンティティの境界を超えた人脈を介して個人やグループによってアクセス可能なリソースのこと」としている。ここでも、総合型クラブを想定した場合、Putnamの想定する橋渡し機能としてのSCは、NPO・ボランティア組織などで醸成されと考えられる。また、社会的な交流を考えると、近所つきあいを結合型の指標とした場合、友人・知人などのつきあいが橋渡しの指標として妥当であると判断した。そこで、橋渡し型SCは、NPO・ボランティア活動の参加状況と、友人・知人とのつきあいの頻度をブリッジング指標として測定を試みることにした。

以下、結合型SCとして測定するSC指数を、「ボンディング指数」、橋渡し型SCとして測定するSC指数を「ブリッジング指数」とする。

以上のことから、本研究における調査項目をまとめたのが、表 3-2 である。

表 3-2 本研究における SC の測定指標

指数		指標	アンケート調査の設問項目
SC 指数	信頼指数	一般的な信頼	一般的な信頼 互酬的規範
		相互信頼・相互扶助	見知らぬ土地への信頼 他者への不信
	つきあい指数	近隣でのつきあい	近所づきあいの程度
			近所づきあいのある人数
		社会的な交流	友人・知人との学校・職場外でのつきあいの頻度
			親戚とのつきあいの頻度
			スポーツ活動への参加状況
			スポーツ以外の趣味・娯楽活動への参加状況
			職場の同僚とのつきあいの頻度
	社会参加指数	社会参加	地縁的な活動への参加状況 ボランティア・NPO・市民活動への参加状況 その他の団体活動への参加状況
ボンディング指数		近隣でのつきあい	近所づきあいの程度
		社会参加	地縁的な活動への参加状況
ブリッジング指数		社会的な交流	友人・知人との学校・職場外での付き合いの頻度
		社会参加	ボランティア・NPO・市民活動への参加状況

(内閣府の指標を参考に筆者加筆)

この結果、個人属性の項目 4 項目、信頼の項目 4 項目、近隣でのつきあいの項目 2 項目、社会的な交流の項目 5 項目、社会参加の 3 項目、スポーツ活動参加の項目 6 項目、計 24 項目で調査を行った。

調査項目は、以下のとおりである。

1. 個人属性

- (1) 性別
- (2) 年齢
- (3) 職業
- (4) 居住年数

2. 信頼

(1) 一般的信頼の項目

あなたは一般的に人は信頼できると思いますか

(2) 他者信頼の項目

あなたは、「見知らぬ土地」で出会う人に対して、信頼できると思いますか

(3) 互酬性の規範の項目

多くの場合、人はほかの人の役に立とうとしますか

(4) 他者への不信（R）の項目

多くの人は隙^{すき}さえあれば、ほかの人を利用しようとするものだと思いますか

3. 近隣でのつきあい

(1) 近所づきあいの程度の項目

あなたは、ご近所の方とどのようなおつきあいをされていますか

(2) 近所づきあいの人数の項目

あなたが、ご近所で付き合っている人の数はどのくらいですか

4. 社会的な交流

(1) 地縁的な活動の有無と状況

・あなたは現在、地縁的な活動（自治会、町内会、婦人会、老人会、青年団、子供会など）をされていますか

・あなたが現在、地縁的な活動（自治会、町内会、婦人会、老人会、青年団、子供会など）に参加される頻度はどの程度ですか

(2) スポーツ活動の有無と状況

・あなたは現在、スポーツ活動（各種スポーツ活動・スポーツ指導など）をされていますか

・あなたが現在、スポーツ活動（各種スポーツ活動・スポーツ指導など）に参加される頻度はどの程度ですか

(3) スポーツ以外の趣味・娯楽活動の参加状況

あなたが現在、スポーツ以外の趣味・娯楽活動（芸術文化活動・生涯学習など）に参加される頻度はどの程度ですか

(4) ボランティア・NPO・市民活動への参加状況

あなたが現在、ボランティア・NPO・市民活動（まちづくり、高齢者・障害者福祉や子育て、美化、防犯、防災、環境、国際協力活動など）をされる頻度はどの程度ですか

(5) その他の団体活動への参加状況

穴型現在、その他の団体（商工会、業種組合、宗教、政治など）活動に参加される頻度はどの程度ですか

5. スポーツ活動参加

(1) あなたは現在、スポーツ活動（各種スポーツ活動・スポーツ指導など）をされていますか

(2) あなたが現在、参加しているスポーツ活動でクラブの運営者（クラブマネージャー、スポーツ指導者、イベントの手伝いなど）として活動していますか

(3) あなたが現在、スポーツ活動（各種スポーツ活動・スポーツ指導など）に参加される頻度はどの程度ですか

(4) あなた自身の参加するクラブの会合・会議に参加されている頻度はどの程度ですか

(5) クラブが主催するイベント（バザー・スポーツ大会の開催など）への参加はどの程度されていますか

(6) あなた自身の参加するクラブでのスポーツ活動以外のコミュニケーションの場（飲み

会・クラブハウスでの交流など)に参加されている頻度はどの程度ですか

第3節 分析の手順

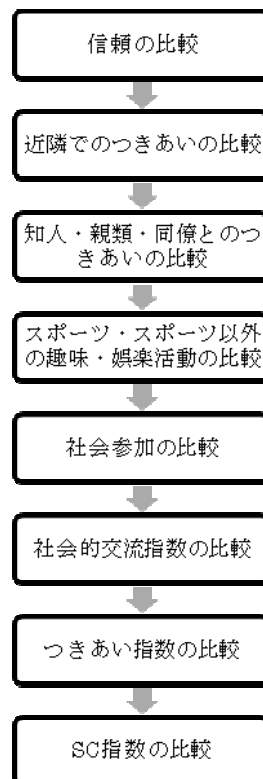


図 3-3 SC 指数の分析の手順

本研究の分析は、総合型クラブと単一型クラブの比較、クラブの参加形態による比較、結合型 SC と橋渡し型 SC の比較、を行う。

まず、総合型クラブと単一型クラブの比較は以下の手順で行う。

- ①「一般的信頼」と「互酬的規範」と「見知らぬ土地での信頼」と「他者への不信」で構成される「信頼」の比較
- ②「近所づきあいの頻度」と「近所づきあいの人数」で構成される「近隣でのつきあい」の比較
- ③「知人と交流」と「親類との交流」と「同僚との交流」によって構成される「友人・親類・同僚との交流」の比較

- ④「スポーツ活動」と「スポーツ以外の趣味・娯楽の活動」の比較
- ⑤「地縁的活動」と「ボランティア・NPO 活動」と「その他の団体活動」によって構成される「社会参加」の比較
- ⑥「友人・親類・同僚との交流」と「スポーツ活動」と「スポーツ以外の趣味・娯楽の活動」をそれぞれ標準化（Z 得点化）した合計得点で算出した「社会的交流指数」の比較
- ⑦「近隣でのつきあい」を標準化（Z 得点化）した数値と「社会的交流指数」の合計得点によって構成される「つきあい指数」の比較
- ⑧「信頼」の 4 項目の合計得点を標準化（Z 得点化）したものと、「つきあい指数」と、「社会参加」の 3 項目の合計得点を標準化（Z 得点化）したものを、全て合計した合成変数である「SC 指数」の比較

次に、「SC 指数」を用い、クラブの参加形態を比較する。クラブの参加形態は「クラブ運営の参加の有無」「会議・会合への参加の有無」「イベントへの参加の有無」「コミュニケーションの場への参加の有無」である。

SC指数			
運営への参加 ・全体の比較 ・総合型クラブでの比較	会議・会合 への参加	イベント への参加	コミュニケー ションの場へ の参加

図 3-4 クラブの参加形態の分析の手順

そして、同一地域での「SC 指数」の比較をする。比較は、「目黒区のクラブ」「調布市のクラブ」「世田谷区のクラブ」である。

SC指数		
目黒区のクラブ の比較	調布市のクラブ の比較	世田谷区のクラブ の比較

図 3-5 同一地域における SC 指数の分析の手順

さらに、総合型クラブと単一型クラブで「ボンディング指数」と「ブリッジング指数」についての比較をする。

「ボンディング指数」は、「近所づきあいの程度」と「地縁的な活動」を設定することとし、「ブリッジング指数」は「NPO・ボランティアの参加状況」と「友人・知人とのつきあいの頻度」を設定した。

ボンディング指数

- ・ 総合型クラブと単一型クラブの比較

ブリッジング指数

- ・ 総合型クラブと単一型クラブの比較

図 3-6 結合型 SC と橋渡し型 SC の分析の手順

最後に、クラブ参加者の個人属性において SC 指数の比較を行った。比較する項目は、「性

別」「年齢」「居住年数」である。

SC指数		
性別の比較	年齢の比較	居住年数の比較

図 3-7 個人属性における SC 指数の分析の手順

以上の手順で分析を行うこととする。

第 4 節 調査クラブの選定

本研究は、総合型クラブと従来型のクラブである小規模の単一型クラブ（以下、「単一型クラブ」と略す）の比較検討を目的としている。クラブの選定の条件は下記のとおりである。総合型クラブは、（１）広域スポーツセンターが把握していること、（２）スポーツ活動と文化的な活動を実施していること、（３）種目が６種目以上で、会員数が 250 名以上であること、を選定条件として設定した。また、クラブ選定時には、体育協会と大学教授の有識者の助言を踏まえ調査対象のクラブを選定した。単一型クラブは、（１）調査を実施した総合型クラブと同一の施設、もしくは同一地域の施設を使用していること、（２）人数が 30 名以下であること、（３）調査を実施した総合型クラブの中で、実施されている種目を行っているクラブであること、（４）活動種目が 1 種目のクラブであること、の 4 つの要件を満たすクラブを選定条件として設定した。

なお、SC の研究では、地域によって SC の違いが表れる。これは、地域の文化的な違いとされている。本研究の目的は、総合型クラブと単一クラブの参加者に関する比較である。そのため、地域によるばらつきを統制する必要があると考え、対象クラブを東京都内のク

ラブに限定し、調査を実施した。

第4節 研究の限界

本研究は、地域によるばらつきの統制を考慮したため、東京都内のみの測定にとどまっている。地域を限定し地域の文化的な違いの影響を排除しているため、結果の一般化には議論の余地がある。これは総合型クラブのある場所に、必ず単一型クラブが存在すると確認ができないと判断したためである。

そして、本研究は個人レベルのつながりやネットワークの分析は行っていない。個人レベルのネットワークを分析していないため、クラブ参加者のつながりまでは分析できないのである。したがって、個人レベルのネットワークは考慮していないため、どのようなネットワークが望ましいかということは言及できない。つまり、どのような人物とつながることがSCの醸成・蓄積につながるかという判断はできないのである。本研究は、総合型クラブの醸成・蓄積が考えられるSCの分析にとどまっているのである。

第5節 調査の概要

地域クラブのSCの比較を行うため、東京都内の総合型地域スポーツクラブと単一型地域スポーツクラブのメンバーを対象とした質問紙調査を行った。調査は、2008年12月初旬から2009年1月初旬にかけて郵送法または、留置法により行った。総合型クラブの調査を行うにあたり、事前に調査内容を電子メールまたは、電話によって伝え、調査に協力できるとクラブマネジャーが判断したクラブに調査を依頼した。郵送法による調査では、調査内容を把握するクラブマネジャーに依頼した後、クラブマネジャーによって、そのクラブ内の会員に質問紙を配布してもらい、それをクラブマネジャーが回収・返送してもらうという手順を取った。また、留置法での調査は、調査者が直接、クラブまたは、活動場所に赴き質問に答えてもらうという手順を取った。

回収数は、総合型クラブでは 3 地区のクラブで 277、回収率は 92.3%であった。単一型クラブでは、すべて留置法で行い、回収数は、121 であった。なお、本研究における統計的な有意水準は 5%未満とした。

表 3-8 が調査概要である。

表 3-8 調査の概要

調査対象	東京都内の 3 地区のクラブ
調査方法	郵送法，または留置法
調査期間	2008 年 12 月初旬～2009 年 1 月初旬
回収数	総合型クラブ：277（回収率 92.3%） 単一型クラブ：121（回収率 100%）

【第3章 参考文献】

- Fukuyama,F:鈴木主税訳（1999）大崩壊の時代：人間の本質と社会秩序の再構築（上）（下）．早川書房．
- Hall, Peter A. (1999) “Social Capital in Britain,” *British Journal of Political Science* vol.29, no.3,pp.417-461.
- Putnam,R.D(2000):柴内康文訳（2006）孤独なボーリング：米国コミュニティの崩壊と再生.柏書房.
- Lin,N（2001）Social Capital: A Theory of Social Structure and Action. Cambridge University Press.
- Krishna,A. and Shrader,E（2002）The Social Capital Assessment Tool: Design and Implementation: In Crootaert,C. and Batelaer,T,V.(eds), Understanding and Measuring Social Capital, World Bank, Washington DC.
- 市田行信・吉川郷主・平井寛・近藤克則・小林慎太郎（2005）マルチレベル分析による高齢者の健康とソーシャルキャピタルに関する研究：知多半島 28 校区に居住する高齢者 9,248 人のデータから.農村計画学会誌,第 24 巻,pp.277-282.
- 金谷信子（2008）ソーシャル・キャピタルの形成と多様な市民社会：地縁型 vs.自律型市民活動の都道府県パネル.ノンプロフィット・レビュー,第 8 巻第 1 号,pp13-31.
- 立木茂雄（2008）ソーシャル・キャピタルの視点から見た地域コミュニティの活性度と安全・安心.都市問題研究,第 60 巻第 5 号,pp50－73.
- 内閣府（2003）ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて.独立行政法人国立印刷局.
- 藤澤由和・濱野強・小藪明生（2007）地域単位のソーシャル・キャピタルが主観的健康観に及ぼす影響.厚生の指標,第 54 巻第 2 号,pp18-23.
- 山内直人（2003）市民活動インデックスによる地域差測定の試み.経済企画協会,pp.40-44.

第4章 地域クラブによるソーシャル・キャピタルの比較

第1節 調査対象の基本属性

調査したクラブの基本属性として、所属クラブ、性別、年齢、職業、居住年数をまとめたのが、表 4-1, 4-2, 4-3, 4-4, 4-5, 4-6 である。

対象者の所属するクラブの形態は、総合型クラブが 277 名 (69.6%)、単一型クラブが 121 名 (30.4%) で、総合型クラブの参加者のサンプルが多い結果となった。これは、単一型クラブを選定する際に、(3)「調査を実施した総合型クラブの中で、実施されている種目を行っているクラブであること」が影響し、単一型クラブが少ない結果となったと考えられる。性別は、総合型クラブは、「女性」の割合が高く、単一型クラブは「男性」の割合が高い。年齢では、総合型クラブは、「60 歳代」が最も多く、次いで「50 歳代」、「40 歳代」と続いているのに対し、単一型クラブは、「20 歳代」が最も多く、次いで「30 歳代」、「40 歳代」といった年齢構成となっている。職業では、女性の高齢者が多いためか、「専業主婦・主夫」が最も多く、次いで「無職」となっているのに対し、単一型クラブでは、「学生」の割合が最も高く、次いで「民間企業、団体の勤め人」となっている。居住年数は、全体で「5 年未満」が最も多く、次いで「5～10 年未満」「10～15 年未満」「30～40 年未満」となっており、総合型クラブでは「30～40 年未満」が最も多く、次いで「5～10 年未満」「25～30 年未満」となっているのに対し、単一型クラブでは「5 年未満」が最も多く、次いで「5～10 年未満」「20～25 年未満」となっている。

以上の結果から、総合型クラブでは、女性と高齢者が多い結果となったのに対し、単一型クラブでは、男性と 20～40 歳代が多い結果となっており、スポーツをする場としてある程度すみ分けができていると考えられる。

表 4-1 所属クラブ

	n	%
総合型クラブ	277	69.60
単一型クラブ	121	30.40
合計	398	100

表 4-2 クラブのタイプと所在地

	n	%
総合型・目黒	100	25.13
総合型・調布	95	23.87
総合型・世田谷	82	20.60
単一型・目黒	37	9.30
単一型・調布	44	11.06
単一型・世田谷	40	10.05
合計	398	100

表 4-3 性別

	総合型ク ラブ	単一型ク ラブ	n	%
男性	97	75	172	43.22
女性	180	46	226	56.78
合計	277	121	398	100

($\chi^2=7.33^{**}$, df=1, **:p<.01)

表 4-4 年齢

	総合型クラブ	単一型クラブ	n	%
19 歳以下	9	10	19	4.77
20 歳代	9	55	64	16.08
30 歳代	8	32	40	10.05
40 歳代	51	21	72	18.09
50 歳代	53	3	56	14.07
60 歳代	99	0	99	24.87
70 歳以上	48	0	48	12.06
合計	277	121	398	100

($\chi^2=67.76^{***}$, df=6, ***:p<.001)

表 4-5 職業

	総合型クラブ	単一型クラブ	n	%
自営業、またはその手伝い	17	2	19	4.77
民間企業・団体の経営者、役員	10	1	11	2.76
公務員、教員	6	9	15	3.77
民間企業、団体の勤め人	23	30	53	13.32
臨時・パート勤め人	42	14	56	14.07
学生	5	56	61	15.33
無職	54	0	54	13.57
専業主婦・主夫	100	8	114	28.64
その他	12	1	13	3.27
合計	275	121	396	99.50

NA=2 ($\chi^2=205.278^{***}$, df=8, ***:p<.001)

表 4-6 居住年数

	総合型クラブ	単一型クラブ	n	%
5 年未満	27	33	60	15.08
5～10 年未満	36	22	58	14.57
10～15 年未満	34	16	50	12.56
15～20 年未満	19	15	34	8.54
20～25 年未満	18	17	35	8.79
25～30 年未満	35	9	44	11.06
30～40 年未満	45	5	50	12.56
40～50 年未満	31	4	35	8.79
50～60 年未満	21	0	21	5.28
60 年以上	11	0	11	2.76
合計	277	121	398	100

($\chi^2=55.97^{***}$, df=9, *** : p<.001)

第 2 節 調査結果

本研究においては、総合型クラブと単一型クラブのソーシャル・キャピタル（以下、「SC」と略す）の比較を行うことを目的としている。Putnam の提唱する、「信頼」「(互酬性の)規範」「ネットワーク」を SC の構成概念ととらえ、その 3 つの視点から SC を測定し、総合型クラブと単一型クラブとの比較、クラブの関与の比較、などを行った。

第 3 節 SC 指数の分析

この節では、「信頼」「つきあい」「社会参加」で構成される SC の分析と、SC 指数の算出を行う。

第1項 信頼の比較

まず、信頼の項目に関しては、4項目設定し、「5. かなりそう思う」から「1. 全く思わない」の5段階のリッカートタイプ尺度を用いて測定を行った。分析では、5. かなりそう思う＝5点、4. そう思う＝4点、3. どちらとも言えない＝3点、2. あまりそう思わない＝2点、1. 全く思わない＝1点として扱った。なお、逆転項目(R)については、5. かなりそう思う＝1点、4. そう思う＝2点、3. どちらとも言えない＝3点、2. あまりそう思わない＝4点、1. 全く思わない＝5点、とした。

質問項目は、①一般的信頼の項目に「あなたは一般的に人は信頼できると思いますか」、②他者信頼の項目に「あなたは、『見知らぬ土地』で出会う人に対して、信頼できると思いますか」、③互酬性の規範の項目に、「多くの場合、人はほかの人の役に立とうとしますか」、④他者への不信(R)の項目に、「多くの人は^{す*}陳さえあれば、ほかの人を利用しようとするものだと思いますか」、を設定した。

信頼に関する項目をまとめたのが、表4-7である。総合型クラブと単一型クラブのT検定を行った結果、有意な差が見られたのは、①「一般的信頼」、②「他者信頼」、③「互酬性の規範」、の項目と、4項目の合計得点であり、総合型クラブの値が単一型クラブに比べ、高い値を示した。また、総合型クラブは信頼の項目で、3以上の値を示しており、総合型クラブの参加者は、人を信頼する傾向にあるといえる。

表4-7 信頼に関する項目

	総合型クラブ (n=275)		単一型クラブ(n=121)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
①一般的信頼	3.82	0.60	3.30	0.67	7.70**
②他者信頼	3.40	0.69	2.55	0.80	10.80*
③互酬性の規範	3.66	0.72	3.10	0.61	7.45***
④他者への不信(R)	3.36	0.75	2.75	0.82	7.27
合計得点	14.25	1.18	11.70	2.37	11.69*
*:p<.05 **:p<.01 ***:p<.001					

第2項 近所つきあいの比較

近所つきあいの項目は、近所つきあいの程度と近所つきあいの人数を測定した。具体的な調査項目は、①近所つきあいの程度の項目として、「あなたは、ご近所の方とどのようなおつきあいをされていますか」、②近所つきあいの人数の項目として、「あなたが、ご近所で付き合っている人の数はどのくらいですか」、を調査項目に設定した。近所つきあいの程度は、「1. 生活面で協力」から、「4. 全くしていない」までの4段階尺度で測定した。また、近所つきあいの人数は、「1. かなり多くの人と面識・交流がある」から「4. 隣の人がだれかもわからない」までの4段階尺度で測定した。分析では、近所つきあいの程度は、1. 生活面で協力=4点、2. 日常的に立ち話をする程度=3点、3. あいさつ程度のつきあい=2点、4. 全くしていない=1点、とし、近所つきあいの人数は、1. かなり多くの人と面識・交流がある=4点、2. ある程度の人と面識・交流がある=3点、3. ごく少数の人とだけ面識・交流がある=2点、4. 隣の人がだれかもわからない=1点、とした。

近所つきあいの項目をまとめたのが、表 4-8 である。総合型クラブと単一型クラブの Mann-whitney の U 検定を行った結果、近所つきあいの程度と、近所つきあいの人数の項目で 0.1%水準の有意な差が見られた。総合型クラブの値は、単一型クラブに比べ高い値を示した。総合型クラブ参加者は、近所つきあいの程度と人数は多くなる傾向にあるといえる。

表 4-8 近所つきあいの項目

	総合型クラブ (n=276)		単一型クラブ (n=121)		U	Z	p
	M	T	M	T			
近所つきあいの程度	2.89	63776.50	2.03	15226.50	7845.50	8.97	.000***
近所つきあいの人数	2.93	63794.00	2.07	15254.00	7873.00	8.91	.000***

M:中央値 T:順位総和 ***:p<.001

第3項 知人・親類・同僚とのつきあいの頻度の比較

知人・親類・同僚とのつきあいの頻度に関する調査は、3項目設定し、「5. 日常的にある」から、「1. 全くない」の5段階尺度で求めた。分析では、5. 日常的にある＝5点、4. ある程度頻繁にある＝4点、3. ときどきある＝3点、2. めったにない＝2点、1. 全くない＝1点、とした。

質問項目は、①友人との交流の頻度の項目に、「友人・知人とのつきあい（学校や職場以外で）について、あなたは普段との程度の頻度でつきあっていますか」、②親族との交流の頻度の項目に、「親戚・親類とのつきあいについて、あなたは普段どの程度の頻度でつきあいをされていますか」、③同僚との交流の頻度の項目は、「学校や職場の同僚とのつきあい（職場以外で）について、あなたは普段どの程度の頻度でつきあいをされていますか」、を設定した。

知人・親類・同僚とのつきあいの頻度に関する項目をまとめたのが、表 4-9 である。総合型クラブと単一型クラブの Mann-whitney の U 検定を行った結果、3項目すべてに、0.1%水準で有意な差が見られ、総合型クラブの参加者は、知人・親類・同僚との交流が多い傾向にある。

表 4-9 知人・親類・同僚とのつきあいの頻度に関する項目

	総合型クラブ(n=276)		単一型クラブ(n=121)		U	Z	p
	M	T	M	T			
①友人との交流の頻度	3.85	62102.50	3.26	17298.50	9917.50	6.95	.000***
②親類との交流の頻度	3.49	64604.00	2.58	14797.00	7416.00	9.43	.000***
③同僚との交流の頻度	3.23	60112.50	2.45	16523.50	9142.50	7.33	.000***

M:中央値 T:順位総和 ***:p<.001

第4項 スポーツ・スポーツ以外の趣味・娯楽の比較

スポーツ・スポーツ以外の趣味・娯楽に関する項目は、スポーツ活動の項目は「1. 参加している」と「2. 参加していない」を聞いた後「参加している」と回答した者に対して、参加の程度の項目を6段階尺度で求めた。スポーツ以外の趣味・娯楽に関する項目は、「1. 参加していない」から「7. 週に4回以上」の7段階で求めた。分析では、2項目とも、参加していない＝1点、年に数回程度＝2点、月に1回程度＝3点、月に2～3回程度＝4点、週に1回程度＝5点、週に2～3回程度＝6点、週に4回以上＝7点、とした。

スポーツ・スポーツ以外の趣味・娯楽活動に関する項目をまとめたのが、表4-10である。総合型クラブと、単一型クラブのMann-whitneyのU検定を行った結果、スポーツ以外の趣味・娯楽活動の項目で、0.1%水準で有意な差が見られた。スポーツ活動の項目では、有意な差が見られなかったが、これは調査対象者が、もともとスポーツクラブの参加者であるためであると考えられる。しかしながら、平均値は単一型クラブのほうがやや高く、傾向として単一型クラブ参加者のほうが、スポーツ活動をしている傾向がある。有意な差が見られたスポーツ以外の趣味・娯楽活動の頻度は、総合型クラブ参加者の平均値が2.75と、スポーツ以外の趣味・娯楽活動をしている傾向にあることが明らかとなった。

表4-10 スポーツ・スポーツ以外の趣味・娯楽に関する項目

	総合型クラブ (n=268)		単一型クラブ(n=121)		U	Z	p
	M	T	M	T			
スポーツ活動	5.05	55236.00	5.21	23370.00	15989.00	0.65	.517
スポーツ以外の趣味・娯楽	2.75	59519.50	1.69	17508.50	10127.50	6.35	.000***

M:中央値 T:順位総和 ***:p<.001

第5項 社会参加の比較

社会参加の項目に関する項目は、3項目設定し、地縁的活動は「1. 参加している」と「2. 参加していない」を聞いた後「参加している」と回答した者に対して、参加の程度の項目を6段階尺度で求めた。ボランティア・NPO活動とその他の団体活動の項目は、「1. 参加していない」から「7. 週に4回以上」の7段階尺度で求めた。分析では、2項目とも、参加していない＝1点、年に数回程度＝2点、月に1回程度＝3点、月に2～3回程度＝4点、週に1回程度＝5点、週に2～3回程度＝6点、週に4回以上＝7点、とした。

質問項目は、地縁的活動の項目に、「あなたが現在、地縁的な活動（自治会、町内会、婦人会、老人会、青年団、子供会など）に参加される頻度はどの程度ですか」、ボランティア・NPOの項目に、「あなたは現在、ボランティア、NPO、市民活動（まちづくり、高齢者・障害者福祉や子育て、美化、防犯・防災、環境、国際協力活動など）をされる頻度はどの程度ですか」、その他の活動の項目に、「あなたが現在、その他の団体（商工会、業種組合、宗教、政治など）活動に参加される頻度はどの程度ですか」、を設定した。

社会参加に関する項目をまとめたのが、表4-11ある。総合型クラブと、単一型クラブのMann-whitneyのU検定を行った結果、地縁的活動とボランティア・NPO活動の項目で、0.1%水準で有意な差が見られ、その他の団体活動で、1%水準で有意な差が見られた。3つの項目すべてにおいて、総合型クラブ参加者が高い値を示した。この結果、総合型クラブ参加者のほうが、社会参加に関して積極的に参加している傾向があるといえる。

表4-11 社会参加に関する項目

	総合型クラブ (n=276)		単一型クラブ(n=121)		U	Z	p
	M	T	M	T			
地縁的活動	2.64	63068.00	1.27	16315.00	8934.00	8.14	.000***
ボランティア・NPO	2.09	57933.00	1.27	18703.00	11322.00	5.49	.000***
その他の団体活動	1.46	54230.50	1.20	21624.50	14243.50	2.62	.009**

M:中央値 T:順位総和 **: $p<.01$ ***: $p<.001$

第6項 社会的な交流指数の比較

この項目では、社会的な交流指数の比較を行った。社会的な交流指数の項目は、知人との交流の程度、親類との交流の程度、同僚との交流の程度、スポーツ活動への参加、スポーツ以外の趣味・娯楽活動への参加をそれぞれ標準化（Z 得点化）し、その合計得点によって求めた。

社会的な交流指数をまとめたのが、表 4-12 である。総合型クラブと単一型クラブで T 検定を行った結果、0.1 水準で、有意な差が見られた。また、社会的な交流指数の平均値は、総合型クラブが高い値を示す結果となり、総合型クラブは、単一型クラブに比べ、社会的な交流の頻度が多い参加者が集まる傾向にあるといえる。

表 4-12 社会的な交流指数

	総合型クラブ(n=262)		単一型クラブ(n=121)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
社会的な交流指数	1.00	2.81	-2.10	1.56	11.37***

***:p<.001

第7項 つきあい指数の比較

この項目では、つきあい指数の比較を行った。つきあい指数は、社会的な交流指数と、近所つきあいの程度と近所つきあいの人数を合計したものを標準化（Z 得点化）したもの、との合計得点によって求めた。

つきあい指数についてまとめたのが、表 4-13 である。総合型クラブと、単一型クラブで T 検定を行った結果、0.1%水準で有意な差が見られた。また、つきあい指数は、総合型クラブが単一型クラブと比べ、高い値を示した。この結果から、総合型クラブには、社会的

な交流や、近所つきあいの頻度や人数の多い人が参加していると考えられる。

表 4-13 つきあい指数

	<u>総合型クラブ(n=261)</u>		<u>単一型クラブ(n=121)</u>		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
つきあい指数	0.66	2.66	-1.34	1.68	7.55***

***:p<.001

第 8 項 ソーシャル・キャピタル指数の比較

この項目では、SC 指数の比較を行った。SC 指数は、信頼の 4 項目の合計得点を標準化（Z 得点化）した数値、つきあい指数、社会参加の 3 項目の合計得点を標準化（Z 得点化）した数値を合計した合成変数によって求めた。

SC 指数を総合型クラブと単一型クラブによって比較した表が、表 4-14 である。総合型クラブと単一型クラブの SC 指数で T 検定を行った結果、SC 指数は、0.1%水準で有意な差が見られた。また、SC 指数は総合型クラブのほうが、単一型クラブより高い値を示した。この結果、総合型クラブは、SC 指数を高める傾向にあると考えられる。つまり、総合型クラブは、単一型クラブに比べ、SC を醸成・蓄積する場となると考えられる。

表 4-14 SC 指数

	<u>総合型クラブ(n=257)</u>		<u>単一型クラブ(n=121)</u>		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
SC 指数	1.46	4.37	-3.28	2.44	11.13***

***:p<.001

第4節 クラブへの関与形態によるソーシャル・キャピタル指数の比較

SC 指数が、クラブ運営参加者と非参加者の間での差異を検討した。SC 指数のクラブ運営参加の有無による比較をまとめたのが、表 4-15 である。クラブ運営参加者と、非参加者の SC 指数に T 検定を行った結果、SC 指数は、0.1%水準で有意な差が見られた。また、SC 指数の平均値は、クラブ運営参加者のほうが高い値を示す結果となり、クラブ運営の参加者は、SC 指数が高いということがいえる。このことは、行實・中西（2007）によっても指摘されており、行實・中西の研究と同様の結果となった。つまり、クラブ運営参加者は、非運営参加者と比べ、SC が高くなる傾向があると考えられる。

表 4-15 クラブ運営参加の有無によるSC指数の比較(全体)

	運営参加者 (n=165)		非運営参加者(n=213)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
SC 指数	1.82	4.59	-1.51	3.75	7.76***

***:p<.001

同様に、SC 指数が総合型クラブにおける参加の形態による違いを検討した。その結果をまとめたのが、表 4-16 である。総合型クラブ内での、クラブ運営参加者と、非運営参加者で SC 指数に T 検定を行った結果、表 4-16 より、SC 指数は総合型クラブの参加者において、運営参加者が非参加者と比べ、5%水準で有意な差を示した。運営参加者は、非運営参加者と比べ、SC 指数の平均値も高いことから、総合型クラブにおいては、運営参加者のほうが、SC 指数は高い値を示すといえる。つまり、総合型クラブの場合であっても、クラブ運営参加者は、非運営参加者と比べ、SC が高い傾向にあると考えられる。

なお、単一型クラブにおける運営参加の有無による SC 指数の検討は、クラブ運営に参加していると回答した母集団の数が少ないため、検定は行わなかった。

表 4-16 総合型クラブにおける運営参加の有無によるSC指数の比較

	運営参加者 (n=148)		非運営参加者(n=109)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
SC 指数	2.25	4.57	0.39	3.85	3.44*

*:P<.05

次に、クラブの会議・会合への参加の有無による違いを検討した。クラブへの会議・会合への参加の有無については、「あなた自身の参加するクラブの会合・会議に参加されている頻度はどの程度ですか」という質問項目を設け、「1. 参加していない」から、「7. 週に4回以上」の7段階尺度を設定した。集計後、「1. 参加していない」と、それ以外を「参加している」もととを考え、調整した。

会議・会合への参加の有無をまとめたのが、表 4-17 ある。参加者と非参加者の SC 指数の T 検定を行った結果、0.1%水準で有意な差が見られた。また、参加者は、非参加者と比べ、SC 指数の平均値が高い値を示した。この結果から、会議・会合の参加者は SC が高い傾向にあることが考えられる。

表 4-17 会議・会合への参加の有無

	参加している(n=226)		参加していない(n=150)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
SC 指数	1.30	4.56	-2.18	3.32	-8.04***

***:p<.001

また、イベントへの参加の有無による違いを検討した。イベントへの参加の有無については、「クラブが主催するイベント（バザー・スポーツ大会の開催など）への参加はどの程度されていますか」という質問項目を設け、「1. 参加していない」から、「7. 週に4回以上」の7段階尺度を設定した。集計後は、会議・会合への参加の有無と同様に「1. 参加していない」と、それ以外を「参加している」もととを考え、調整した。

イベントへの参加の有無をまとめたのが、表 4-18 である。参加者と非参加者の SC 指数の

T 検定を行った結果、0.1%水準で有意な差が見られた。また、参加者は、非参加者と比べ、SC 指数の平均値が高い値を示した。この結果から、イベントへの参加者は、非参加者と比べ、SC が高い傾向にあることが考えられる。

表 4-18 イベントへの参加の有無

	参加している(n=220)		参加していない(n=157)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
SC 指数	1.41	4.50	-2.20	3.43	-8.34***

***:p<.001

さらに、コミュニケーションの場への参加の有無による違いの検討も行った。コミュニケーションの場への参加の有無の質問項目は、「あなた自身の参加するクラブでのスポーツ活動以外でのコミュニケーションの場（飲み会・クラブハウスでの交流など）に参加されている頻度はどの程度ですか」という質問を設け、「1. 参加していない」から、「7. 週に 4 回以上」の 7 段階尺度を設定した。集計後は、上記の 2 つと同様に「1. 参加していない」と、それ以外を「参加している」もととを考え、調整した。

コミュニケーションの場への参加の有無をまとめたのが、表 4-19 である。参加者と非参加者の SC 指数に T 検定を行った結果、0.1%水準で有意な差が見られた。また、参加者は、非参加者と比べ、SC 指数の平均値が高い値を示した。この結果から、コミュニケーションの場への参加者は、SC の高い傾向にあると考えられる。

表 4-19 コミュニケーションの場への参加の有無

	参加している(n=285)		参加していない(n=89)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
SC 指数	0.30	4.64	-1.45	3.39	-3.30***

***:p<.001

第5節 同一地域におけるソーシャル・キャピタル指数の比較

同一地域に存在する総合型クラブと単一型クラブについて SC 指数の違いを検討した。目黒区にあるクラブの SC 指数の違いをまとめた結果をまとめたのが、表 4-20 である。目黒区にある総合型クラブと、単一型クラブの SC 指数の T 検定を行った結果、0.1%水準で有意な差が見られた。また、総合型クラブと単一型クラブの SC 指数の平均値は、総合型クラブのほうが高い値を示した。

表 4-20 目黒区のクラブ

	<u>総合型クラブ(n=98)</u>		<u>単一型クラブ(n=37)</u>		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
SC]指数	2.29	4.48	-3.72	1.48	7.98***

***:p<.001

調布市にあるクラブの SC 指数の違いをまとめたのが、表 4-21 である。調布市にある総合型クラブと単一型クラブの SC 指数に T 検定の結果、SC 指数は、1%水準で有意な差が見られた。また、総合型クラブと単一型クラブの SC 指数の平均値は、総合型クラブのほうが高い値を示した。

表 4-21 調布市のクラブ

	<u>総合型クラブ(n=87)</u>		<u>単一型クラブ(n=44)</u>		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
SC 指数	1.09	4.50	-3.08	3.00	5.57**

**:p<.01

世田谷区のクラブの SC 指数の違いをまとめたのが、表 4-22 である。世田谷区にある総合型クラブと、単一型クラブの SC 指数に T 検定の結果、SC 指数は、5%水準で有意な差が見られた。また、SC 指数の平均値は、総合型クラブが単一型クラブに比べ高い値を示した。

表 4-22 世田谷区のクラブ

	総合型クラブ(n=72)		単一型クラブ(n=40)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
SC 指数	0.77	3.93	-3.10	2.55	5.60*

*:p<.05

地域ごとのクラブでの SC 指数の違いを検討したが、同一地域のクラブであっても、SC 指数には違いが見られ、総合型クラブの SC 指数は高い値を示す。この結果から、SC 指数は、総合型クラブにおいて醸成され、同一地域にある単一型クラブと総合型クラブでは、総合型クラブが SC を醸成・蓄積する土壌となりうると考えられる。

第 6 節 結合型ソーシャル・キャピタルと橋渡し型ソーシャル・キャピタルの比較

結合型 SC として、近所つきあいの程度と、地縁的な活動状況を「ボンディング指数」として測定した。総合型クラブと単一型クラブとの比較をまとめたのが、表 4-23 である。総合型クラブと単一型クラブの比較の結果、0.1%水準で有意な差が見られた。平均値でも、総合型クラブが高い値を示したことから、総合型クラブは結合型 SC を高める可能性が考えられる。

表 4-23 ボンディング指数

	総合型クラブ(n=270)		単一型クラブ(n=121)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
ボンディング指数	0.41	1.72	-9.20	0.77	8.13***

***:p<.001

橋渡し型 SC は、NPO・ボランティア活動の参加状況と、友人・知人とのつきあいの頻度を「ブリッジング指標」として測定を試みた。総合型クラブと単一型クラブとの比較をまとめたのが、表 4-25 である。総合型クラブと単一型クラブの比較の結果、0.1%水準で有意な差を示した。ブリッジング指数の平均値は、総合型クラブのほうが高い値を示していることから、総合型クラブは、単一型クラブと比べ、橋渡し型 SC を高める可能性が考えられる。

表 4-25 ブリッジング指数

	総合型クラブ(n=276)		単一型クラブ(n=121)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
ブリッジング指数	0.55	1.62	-1.27	1.15	11.28***

***:p<.001

以上のことから、総合型クラブは、単一型クラブと比較して、結合型 SC・橋渡し型 SC を高めている可能性があると考えられる。

第7節 個人属性によるSC指数の比較

個人属性のSC指数の違いも検討した。性別によるSC指数の違いをまとめたのが、表4-26である。性別による比較では、SC指数に統計的に有意な差はなかった。つまり、総合型クラブ参加者の中では、性別によるSCの醸成・蓄積の影響の違いはないと考えられる。

表 4-26 性別によるSC指数の比較

	男性(n=169)		女性(n=209)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
SC 指数	-0.24	4.53	8.29	4.39	-0.70

次に、年齢によるSC指数の比較を行った。年齢によるSC指数の比較をまとめたのが、表4-27である。年齢とSC指数の一元配置分散分析の結果、19歳以下は50歳代、60歳代、70歳以上に有意差が認められた。20歳代は50歳代、60歳代、70歳以上に統計的に有意な差が認められた。30歳代は、50歳代、60歳代、70歳代に有意差が認められた。40歳代は、50歳代、60歳代、70歳代に有意な差が認められた。SC指数の平均値も年齢が上がるにつれ上昇する傾向がある。以上の結果から、SC指数は、高齢者ほど高まる傾向にあると考えられる。

表 4-27 年齢によるSC指数の比較

		①19	②20	③30	④40	⑤50	⑥60	⑦70	合計	F 値		
		歳以下	歳代	歳代	歳代	歳代	歳代	歳以上				
SC 指 数	平均	-1.99	-2.63	-2.78	-1.41	1.42	2.36	2.31	-6.03	19.72	①-⑤*	③-⑤⑥⑦***
	値										①-⑥***	④-⑤**
	標準	3.73	3.20	2.75	3.58	4.49	4.37	4.47	4.45		①-⑦**	④-⑥⑦***
	偏差										②-⑤⑥⑦***	

*:p<.05 **:p<.01 ***:p<.001

そして、居住年数による SC 指数の比較を試みた。居住年数による SC 指数の比較を行った。居住年数による SC 指数をまとめたのが、表 4-28 である。Kruskal-Wallis の H 検定を行った結果、有意差が確認されたため、多重比較検定を行った。その結果、5 年未満は、20～25 年未満、25～30 年未満、40～50 年未満、50～60 年未満で統計的に有意な差が見られた。5～10 年未満は、20～25 年未満、40～50 年未満、50～60 年未満で統計的に有意な差が見られた。10～15 年未満は、20～25 年未満、40～50 年未満、50～60 年未満で統計的に有意な差が見られた。この結果から、居住年数が長いほど SC 指数が高まると言うわけではないが、25 年以上の居住年数から SC 指数が高くなる傾向があると考えられる。

表 4-28 居住年数による SC 指数の比較

	①5 年 未満	②5～ 10 年 未満	③10 ～15 年未満	④15 ～20 年未満	⑤20 ～25 年未満	⑥25 ～30 年未満	⑦30 ～40 年未満	⑧40 ～50 年未満	⑨50 ～60 年未満	⑩60 年以上	合計	F 値		
平													①-⑤	②-⑧⑨
均	-2.02	-1.26	-1.43	-0.26	-0.12	1.64	0.92	2.13	2.75	0.52	-6.03		**	**
S													①-⑥	
C													*	③-⑤*
指												5.55		
標													①-⑧	③-⑧⑨
数													⑨***	**
準	3.24	4.29	3.43	4.62	4.39	4.67	3.86	5.23	4.39	5.96	4.45			
偏													②-⑤	
差													*	

*:p<.05 **:p<.01 ***:p<.001

第8節 小括

以上の結果より、各項目を以下のようにまとめることができた。

「信頼」「つきあい」「社会参加」それらを合成変数とした SC 指数は、総合型クラブで高い評価となった。さらに、クラブへの参加の形態は、運営者、会議・会合、イベント、コミュニケーションの場、と参加している人のほうが、SC 指数は高い値を示した。同一地域でのクラブによる比較も、総合型クラブのほうが SC 指数は、高い値を示した。また、結合型 SC・橋渡し型 SC も、総合型クラブは高い値を示した。そして、50 歳以上は SC 指数が高い値を示し、居住年数においても 25 年以上の居住年数から SC 指数は高い値を示す。

以上の結果を簡単にまとめたのが、表 4-29 である。

表 4-29 分析結果

SC 指数	総＞単
・信頼	総＞単
・つきあい	総＞単
・社会参加	総＞単
クラブ関与形態	
・クラブ運営参加（全体）	有＞無
・クラブ運営参加（総合型）	有＞無
・会合・会議	有＞無
・イベント	有＞無
・コミュニケーションの場	有＞無
橋渡し型 SC・結合型 SC	
・橋渡し型 SC	総＞単
・結合型 SC	総＞単

総＝総合型クラブ，単＝単一型クラブ

【第 4 章 参考文献】

佐藤進・山次俊介・長澤吉則編著．出村愼一監修（2007）健康・スポーツ科学のための SPSS による統計解析入門．杏林書院．

第5章 結論

第1節 総括

本研究の目的は、Putnam の提唱するソーシャル・キャピタル（以下、「SC」と略す）理論に基づいて、総合型クラブで醸成されるであろう SC を分析することであった。本研究は、SC 理論を援用し、総合型クラブと単一型クラブを比較することで、総合型クラブの特徴の把握を試みた。その結果、総合型クラブにおいては、SC 指数が高い値を示す結果となった。これは、総合型クラブがもともと SC の高い人が参加しているか、総合型クラブによって SC が高められるか、という因果モデルは本研究では設定していないため、確認はできない。しかし、本研究の結果から、総合型クラブの機能として、SC を醸成・蓄積する基盤となる可能性があると考ええる。

今まで、理念的に語られることの多かった総合型地域スポーツクラブの質的成果について、本研究では、定量的に把握することができた。総合型地域スポーツクラブとして地域社会の中でスポーツを行うが、地域社会のネットワークやつながりを生み出し、信頼や規範といった心理的な側面にまで影響を与えているということを定量的に把握できたことは、有意義である。

第1項 総合型クラブのソーシャル・キャピタル

総合型クラブの参加者の特性として、「信頼」「つきあい」「社会参加」が高いということは確認できた。このことから、総合型クラブが地域社会でのネットワークの基盤として機能しうるといえる。SC の測定によって総合型クラブの機能的な側面が明確になったことは、有意義であった。測定したほぼすべての項目で、総合型クラブが高い値を示したことは、「信頼」「つきあい」「社会参加」といった SC と総合型クラブに、相関がある可能性が示唆されるということである。

また、同一地域で総合型クラブと単一型クラブの SC 指数を比較した結果からは、総合型クラブの SC は単一型クラブより高い値を示している。これは、3 地域で共通の結果であった。つまり、総合型クラブで活動すること自体が SC を高めている可能性が考えられる。

以上のことから、総合型クラブとして活動することは、地域社会の「信頼」「つきあい」「社会参加」といったものを醸成・蓄積する可能性が考えられる。

第2項 クラブへの関与形態とソーシャル・キャピタル

本研究では、クラブの関与の形態と SC 指数を比較している。本研究で確認されたことは、クラブへの何かしらの方法で関与している人物は、SC 指数が高いということであった。行實・中西（2007）の研究では、総合型クラブの運営参加者は橋渡し型 SC が高いという結果となっているが、本研究では、クラブ運営参加者は橋渡し型 SC と結句型 SC の両 SC が高い値を示した。このことから、クラブ運営参加者は地域社会や地域住民とのつながりが強く、また社会参加や活動にも積極的であることが考えられる。

また、総合型クラブは住民の自主運営が望ましいとされているが、SC という視点で見た場合、クラブの運営に携わるだけではなく、何かスポーツ活動以外のクラブへ参加しているということが、ネットワークや信頼に相関があると考えられるということである。このことは、小林・原田（2006）の研究でも指摘されているが本調査でも、同様の結果となった。地域を基盤として活動するクラブであるならば、会員に何かしらの参加を促し、参加できる仕組みを作ることが望ましいのだろう。

第 3 項 総合型クラブの結句型ソーシャル・キャピタルと橋渡し型ソーシャル・キャピタル

総合型クラブの結句型 SC と橋渡し型 SC を検討した結果、総合型クラブは結句型 SC と橋渡し型 SC の両 SC が高い値を示した。これは、総合型クラブが地域社会の中で、地域社

会の結束を強め、さらに広めるような活動を促進している可能性が示唆される。行實・中西（2007）は、総合型クラブのタイプを結合型 SC が高いクラブと橋渡し型 SC が高いクラブというように分類したが、本研究で見られた結果からは、総合型クラブは単一型クラブよりも、結合型 SC と橋渡し型 SC が高い値を示すということが分かっている。この結果から、単一型クラブの場合、ネットワークやつながり、そこから生まれる信頼や規範といった SC の醸成・蓄積は比較的少ないと考えられる。今後、地域社会の中でスポーツクラブの果たす役割を広げるには、総合型クラブとして活動しネットワークやつながりを広げるか、もしくは単一型クラブであっても意識的に異なった分野の活動を促し、クラブの活動に参加してもらう仕組みを作ることが望ましいだろう。

第 2 節 実践的示唆

本研究で確認できたのは、以下の 3 点である。それは、①総合型クラブと単一型クラブでは総合型クラブのほうが SC は高い、②クラブへの関与は、多様な活動を行うことで SC は高まる、③総合型クラブは結合型 SC と橋渡し型 SC が高い値を示す、ということである。総合型クラブは、地域社会の中で SC を醸成・蓄積する可能性が考えられ、総合型クラブとしての活動が地域社会の結びつきやつながり、社会参加に良い影響を与えていると考えられる。

実践的な示唆としては、政策レベルと、クラブ事業レベルの 2 点ある。政策レベルでは、総合型地域スポーツクラブの育成は、会員の積極的な関与を促す仕組みを作るべきである。これは、総合型クラブの運営者としてクラブの活動を行う仕組みづくりだけではなく、とにかく何か総合型クラブへの関与の機会を増加させる政策展開が望ましいと考える。総合型クラブは、地域住民の自主運営が望ましいとされており、従来型の単一で小規模のクラブとは異なるという意味で自主運営を促すことはもちろん大切である。しかし、地域社会を巻き込み、住民のつながりやネットワークを広げるという意味では、クラブとつながっていること自体が SC の醸成・蓄積に貢献しているのであり、いわば「参加することに意義がある」のである。もちろん、地域住民の自主運営によって総合型クラブの活動は行われるべきで、行政に依存しすぎない自立した活動であるべきである。そうした住民の自主的

な意思決定によって運営される自立した総合型クラブであれば、次のクラブ事業の方向性として地域住民を巻き込む方策が必要なのだろう。今までの総合型クラブの施策が、地域住民の自主運営意識を促す総合型クラブの育成施策だとするならば、次の施策に必要なことは、いかに地域住民を巻き込んで活動するか、ということであると考えるのである。今後、地域で自立した総合型クラブは、地域社会を巻き込むネットワークのハブの役割が期待される。総合型クラブへの参与形式は多様化するような工夫をすべきであろう。そのために、政策の評価として、総合型クラブの質的成果としての SC の測定を行う必要があると考える。

次に、クラブ事業レベルでは、コアメンバーと全く関わらないメンバーを繋ぐ、ハブになるメンバーを見つけ、働きかけるということが重要であると考えられる。総合型クラブ内での活動がクラブ内での SC を醸成・蓄積する可能性がある。中でも、クラブマネージャーなどの主要な意思決定をするコアなメンバーと、まったく運営に携わらないメンバーとの間には、SC に違いが見られた。また、コミュニケーションの場への参加や、イベントへの参加、会議・会合への参加や、その他のクラブ運営にかかわる人は、SC が高くなる傾向がある。さらに、多種目の活動を行うことでクラブ間を移動し、ネットワークを広げる活動を行うメンバーがいることが対面でのインタビュー調査と参与調査で確認できた。

本研究では、対面でのアンケート記入を試みた方の中で、「クラブ運営に参加している」と答えた人にインタビューを試みた。その結果から、主要な意思決定には参加していないものの、クラブの中での交流やクラブ内で多種目のスポーツ活動を行っている人が多いことが感じられた。これは、コアメンバーと、各種目に参加するメンバーとの間をつなぐ、ネットワークのハブのような役割として、機能していると推察できる。

中心か周辺かという点、いかにも中心のほうが望ましいと思われるかもしれない。しかし、そうとは限らず、周辺にもよいところがある。一つは、渦中にいないがゆえの冷静さである。中心にいと、全体を見渡しにくくなるのが世の常である。物事を推進していくためには中心にいる方がよいが、その舵取りをする際には周辺の意見も貴重である。もう一つは、イノベーション（革新）である。「イノベーションは周辺から」という命題は一定の妥当性を有している。既存の価値観や世界観に囚われず変革を起こすためには、中心でない人も重要な役割を果たすからである。

近年のインターネットコミュニティの研究でも、周辺に位置する人たちの役割がクローズアップされている。中心で積極的に発言する RAM（Radical Active Member）よりもそ

の様子を傍観する ROM (Read Only Member)の方がネットコミュニティの外の世界への波及力があったり、(國領・野原, 2003), 実際の購買を担っていたりする(小川ら, 2003). ネットコミュニティにおける RAM と ROM が現実世界の中心と周辺と必ずしも対応しているとは言い切れないが, 総合型クラブ組織でも, 周辺に位置する人は相応の役割があるかもしれない.

クラブの行事に参加するメンバーだけではなく, 多種目で交流する周辺メンバーが各種目の間に立って, 対面でのコミュニケーションを増やしている. 現在でこそ主要なコミュニケーション手段は, インターネットや電子メールに置き換えられつつあるが, 対面でのコミュニケーションは総合型クラブという多種目の活動では, 単一型クラブの中では起こらない種目間の新しい「つながり」ができたようである. クラブ間での交流が増えることで, 仲間作りに積極的な人が, 新しい「つながり」を生み出してくれるからである. そして, このような, 普段の一つだけのクラブに参加する人同士の付き合いとは違う「つながり」が重要な役割を果たす. 西口(2007)によれば, 普段のつながりである「近所づきあい」8割に対して, それをバイパスするような「遠距離交際」が2割でも存在すれば, 求める情報が効率的に手に入る優れたコミュニティとなるといわれている. クラブ間での交流は, 人数が多ければすぐれたコミュニティを形成するのではなく, 数人程度のメンバーが交流のハブとなって, 活動することは優れたコミュニティ形成に寄与している可能性がある.

ネットワークを強化するためには, 互いのコミュニケーション手段が必要である. それは, 会合や会議での公的な意見交換の場から, クラブハウスや飲み会といった私的な意見交換の場など, 人々が共有することのできる場を増やすことで, コミュニケーションの機会を増やすという方法も考えられる. また, 近年では, 主要なコミュニケーション手段として, インターネットや電子メールの活用も有効である. 場のマネジメントによって, 交流を深め, ネットワークを強化する方法と同時に, 種目やクラブの垣根を越えた数人の活動が組織のハブとなり, コミュニティ形成に寄与していると考ええる. 周辺メンバーの活動や交流によるネットワーク形成が総合型クラブの特徴といえるのである.

第3節 今後の課題

本研究では、SC という概念を援用し、地域クラブである総合型クラブと単一型クラブを比較することで、総合型クラブで醸成・蓄積される SC について分析を試みた。しかしながら、本研究で確認されたクラブへの参与方法の具体的な分析については、今後の研究が望まれる。総合型クラブが SC を醸成・蓄積している可能性について言及できたものの、その原因となる活動内容などには、議論の余地がある。SC の相対的な比較でとどまっており、SC がクラブへの参加の方法による因果モデルの構築による詳細な分析が必要である。つまり、総合型クラブ内で醸成・蓄積される SC を詳細に分析する定性的な調査や調査項目の検討が必要であると考ええる。

また、SC の分析手法についても議論の余地がある。SC の分析はさまざまな方法で行われ、個人のネットワークや集団のレベル、地域レベルの分析など多くの分析が可能である。本研究では、クラブ参加者に直接回答を求めているが、より多様な側面からの分析も必要である。具体的には、マクロレベルとして市区町村や都道府県での比較、ミクロレベルとしてクラブ活動者の具体的なネットワークの分析などが考えられる。さまざまな分析によって総合型クラブの醸成・蓄積する SC を見出す必要がある。

最後に、スポーツ経営という視点で見た場合、SC は多くの場面に援用が可能であり、ほかのスポーツ活動の分析も可能性がある。例えば、プロスポーツの顧客ネットワークの分析から、新たな顧客アプローチを見出すといったことが考えられる。スポーツ活動によって生じるつながりやネットワークの分析は、スポーツの SC 分析における今後の課題といえよう。

【第 5 章 参考文献】

- 小川美香子・佐々木裕一・津田博史他（2003）黙って読んでいる人達（ROM）の情報伝播行動とその購買への影響.マーケティング・ジャーナル,第 22 巻第 4 号,pp.39-88.
- 國領二郎・野原佐和子（2003）電子多対多メディアによるコミュニケーションに黙って参加している人たち（ROM）の情報行動.経営情報学会誌,第 12 巻第 2 号,pp.37-46.
- 西口敏宏（2007）遠距離交際と近所づきあい：成功する組織ネットワーク戦略.NTT 出版.

【引用・参考文献・参考 URL 一覧】

- Adler, P. S. and S. W. Kwon (2002) Social Capital. *Academy of Management Review*, Vol.27, pp.17-40.
- Baker,W: 中島豊訳(2001)ソーシャル・キャピタル.ダイヤモンド社.
- Burt,R(2005)Brokerage & Closure: An Introduction to Social Capital, Oxford University Press.p4.
- Coleman,J.S.(1990)Foundations of social theory. Cambridge,MA: Harvard University Press.
- Fukuyama,F(1999):鈴木主税訳 (2000) 大崩壊の時代: 人間の本质と社会秩序の再構築 (上) (下) .早川書房.
- Gittell,R. & Vidal,A.(1998)Community organizing: Building social capital as a development strategy. Thousand Oaks, CA: SAGE Publications.
- Hall, Peter A. (1999) "Social Capital in Britain," *British Journal of Political Science* vol.29, no.3,pp.417-461.
- Kawachi, I. & Kennedy, B. P.(2002):西信雄・高尾総司・中山健夫監訳 (2004) 不平等が健康を損なう. 日本評論社.
- Kawachi, I.(2006)Commentary: Social capital and health: Making the connections one step at a time. *International Journal of Epidemiology*, 35(4), pp.989-993.
- Kawachi,I. ,Subramanian,S.V.& Kim,D. (2007) : 藤澤由和・高尾総司・濱野強監訳 (2008) ソーシャル・キャピタルと健康. 日本評論社.
- Krishna,A. and Shrader,E (2002) The Social Capital Assessment Tool: Design and Implementation: In Crootaert,C. and Batelaer,T,V.(eds), *Understanding and Measuring Social Capital*, World Bank, Washington DC.
- Lin,N (2001) *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*. Cambridge University Press.
- Mitchell, C.U. & LaGory, M.(2002)Social capital and mental distress in an impoverished community. *City & Community*, 1,pp.195-215.
- OECD (2001) 人的資本及び社会的資本の役割.
- Pores,A. (1998) Social capital: Its origins and applications in modern sociology. *Annual*

- Review of Sociology.24,24,
- Putnam,R.D (1993) :河田潤一訳 (2001) 哲学する民主主義 : 伝統と改革の市民的構造.NTT出版.
- Putnam,R.D (2000) :柴内康文訳 (2006) 孤独なボーリング : 米国コミュニティの崩壊と再生.柏書房.
- Szreter, S. & Woolcock, M.(2004)Health by association? Social capital, social theory, and the political economy of public health. International Journal of Epidemiology, 33(4),pp.650-667.
- Varshney, A.(2002)Ethnic conflict & civic life. Hindus and muslims in India. New haven, CT: Yale University Press.
- Woolcock,M. (2000) The place of social capital in understanding social and economic outcomes. The World Bank. p5.
- 市田行信・吉川郷主・平井寛・近藤克則・小林慎太郎 (2005) マルチレベル分析による高齢者の健康とソーシャルキャピタルに関する研究 : 知多半島 28 校区に居住する高齢者 9,248 人のデータから.農村計画学会誌,第 24 巻,pp.277-282.
- 稲葉陽二 (2005) ソーシャル・キャピタルの経済的含意 : 心の外部性とうどう向かい合うか.計画行政,日本計画行政学会,第 28 巻第 4 号,pp.17-22.
- 小川美香子・佐々木裕一・津田博史他 (2003) 黙って読んでいる人達 (ROM) の情報伝播行動とその購買への影響.マーケティング・ジャーナル,第 22 巻第 4 号,pp.39-88.
- 金光淳 (2003) 社会ネットワーク分析の基礎.勁草書房.
- 金光淳 (2007) 双対ソーシャル・キャピタルに注目した日本の取締役兼任ネットワーク進化プロセスの解明.組織科学,第 40 巻第 3 号,pp.33-40.
- 金谷信子 (2008) ソーシャル・キャピタルの形成と多様な市民社会 : 地縁型 vs.自律型市民活動の都道府県パネル.ノンプロフィット・レビュー,第 8 巻第 1 号,pp13-31.
- 國領二郎・野原佐和子 (2003) 電子多対多メディアによるコミュニケーションに黙って参加している人たち (ROM) の情報行動.経営情報学会誌,第 12 巻第 2 号,pp.37-46.
- 小林和子・原田宗彦 (2006) 日本体育・スポーツ経営学会第 29 回大会号.pp.51-52.
- 斎尾直子・宮川大介 (2006) 過疎農村地域におけるスポーツネットワークを通じた地域づくりに関する研究.農村計画誌,第 25 号,pp.299-304.
- 佐藤進・山次俊介・長澤吉則編著. 出村慎一監修 (2007) 健康・スポーツ科学のための SPSS

- による統計解析入門. 杏林書院.
- 前場裕平・野崎武司 (2005) 日本体育・スポーツ経営学会第 28 回大会号, pp.25-26.
- 内閣府 (2003) ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて. 独立行政法人国立印刷局.
- 内閣府経済社会総合研究所編 (2005) コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書.
- 中野勉 (2007) 巨大産業集積の統合メカニズムにつちえの考察—社会ネットワーク分析からのアプローチ—. 組織科学, 第 40 巻第 3 号, pp.55-65.
- 長積仁・榎本悟・松田陽一 (2006) スポーツ振興とソーシャル・キャピタルの相互補完関係：ソーシャル・キャピタル研究の視座と可能性. 徳島大学総合科学部人間科学研究, 第 14 巻, pp.9-24.
- 中西純司 (2005) 総合型地域スポーツクラブ構想の将来展望：市民参加型「まちづくり」の可能性を求めて. 福岡教育大学紀要, No.54, pp.63-76.
- 西口敏宏 (2007) 遠距離交際と近所づきあい：成功する組織ネットワーク戦略. NTT 出版.
- 野沢慎司監訳 (2006) リーディングスネットワーク論：家族・コミュニティ・社会資本関係. 勁草書房.
- 立木茂雄 (2008) ソーシャル・キャピタルの視点から見た地域コミュニティの活性度と安全・安心. 都市問題研究, 第 60 巻第 5 号, pp.50-73.
- 西口敏宏 (2007) 遠距離交際と近所づきあい：成功する組織ネットワーク戦略. NTT 出版.
- 藤澤由和・濱野強・小藪明生 (2007) 地域単位のソーシャル・キャピタルが主観的健康観に及ぼす影響. 厚生学の指標, 第 54 巻第 2 号, pp.18-23.
- マッキーバー, R. M. : 中久郎・松本通晴通訳 (1975) コミュニティ. ミネルヴァ書房.
- 宮川公男・大守隆編 (2004) ソーシャル・キャピタル. 東洋経済新報社, pp.3-54.
- 文部科学省 HP : (<http://www.mext.go.jp/>)
- 安田雪 (2001) 実践ネットワーク分析—関係を解く理論と技法. 新曜社.
- 山内直人 (2003) 市民活動インデックスによる地域差測定の試み. 経済企画協会, pp.40-44.
- 山田仁一郎・山下勝・若林直樹・神吉直人 (2007) 高業績映画プロジェクトのソーシャル・キャピタル：優れた日本映画の「組」はどのような社会ネットワークから生まれるか？. 組織科学, 第 40 巻第 3 号, pp.33-40.
- 行實鉄平・中西純司 (2007) 日本体育・スポーツ経営学会第 30 回大会号, pp.49-50.

若林直樹（2006）日本企業のネットワークと信頼—企業間関係の新しい経済社会学的分析.
有斐閣.

卷末資料

調査のお願い

この調査は、地域のスポーツクラブとそのクラブに参加するメンバーの活動や交流の実状を把握し、地域のスポーツクラブのあり方を検討することを目的としております。

この結果はすべて統計的に処理されますので、ご迷惑をおかけすることは一切ございません。ありのままをお答えくださいますようお願い申し上げます。

なお、記入に当たって不明な点等がございましたら、下記までご連絡ください。

お忙しい中、ご面倒とは存じますが、ご協力をたまわりますようよろしくお願い申し上げます。

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科 宮宗 大輔
指導教員 早稲田大学スポーツ科学学術院 教授 木村 和彦
早稲田大学スポーツ科学学術院 准教授 作野 誠一

TEL : 090-8997-0080
E-mail : miyasou-daisuke@akane.waseda.jp

	そう 思う かなり	そう 思う	言え ない どちら とも	思わ ない あまり そう	思わ ない 全く
【問5】あなたは、一般的に人は 信頼できると思いますか？	5	4	3	2	1
【問6】あなたは「見知らぬ土地」で出会う人に対 して、信頼できると思いますか？	5	4	3	2	1
【問7】多くの場合、人はほかの人の 役に立とうとするとしますか？	5	4	3	2	1
【問8】多くの人は隙さえあれば、ほかの人を利用 しようとするものだと思いますか？	5	4	3	2	1

【問9】あなたは、ご近所の方とどのようなおつきあいをされていますか？

1. () 生活面で協力
2. () 日常的に立ち話をする程度
3. () あいさつ程度の最低限の付き合い
4. () 全くしていない

【問10】あなたが、ご近所でつきあっている人の数はどのくらいですか？

1. () かなり多くの人と面識・交流がある
2. () ある程度の人と面識・交流がある
3. () ごく少数の人とだけ面識・交流がある
4. () 隣の人がだれかもわからない

	日常 的に ある	頻 繁 に ある 程度	時 ど き に ある	め っ た に な い	全 く な い
【問11】友人・知人とのつきあい（学校や職場以外 で）について、あなたは普段どの程度の頻度でつき あいをされていますか？	5	4	3	2	1
【問12】親戚・親類とのつきあいについて、あなた は普段どの程度の頻度でつきあいをされています か？	5	4	3	2	1
【問13】学校や職場の同僚とのつきあい（職場以外 で）について、あなたは普段どの程度の頻度でつき あいをされていますか？	5	4	3	2	1

【問 14-1】あなたは現在、地縁的な活動（自治会、町内会、婦人会、老人会、青年団、子供会など）をされていますか？

1. ☐ している
2. ☐ していない

【問 14-2】（【問 14-1】を「(地縁的な活動) している」と回答した人のみ）あなたが現在、地縁的な活動（自治会、町内会、婦人会、老人会、青年団、子供会など）に参加される頻度はどの程度ですか？

1. ☐ 年に数回程度
2. ☐ 月に 1 回程度
3. ☐ 月に 2 ～ 3 回程度
4. ☐ 週に 1 回程度
5. ☐ 週に 2 ～ 3 回程度
6. ☐ 週に 4 回以上

【問 15-1】あなたは現在、スポーツ活動（各種スポーツ活動・スポーツ指導など）をされていますか？

1. ☐ している
2. ☐ していない

【問 15-2】（【問 15-1】「スポーツ活動をしている」と回答した人のみ）あなたが現在、参加しているスポーツ活動でクラブ運営の仕事（クラブマネージャー、スポーツ指導者、イベントの手伝いなど）をどの程度していますか？

1. ☐ 週 1 回以上
2. ☐ 月に一回程度
3. ☐ 年に数回程度
4. ☐ していない

【問 15-3】（【問 15-1】を「(スポーツ活動) している」と回答した人のみ）あなたが現在、スポーツ活動（各種スポーツ活動・スポーツ指導など）に参加される頻度はどの程度ですか？

1. ☐ 年に数回程度
2. ☐ 月に 1 回程度
3. ☐ 月に 2 ～ 3 回程度
4. ☐ 週に 1 回程度
5. ☐ 週に 2 ～ 3 回程度
6. ☐ 週に 4 回以上

【問 15-4】（【問 15-1】を「(スポーツ活動を) している」と回答した人のみ)

	参加していない	年に数回程度	月に1回程度	月に2～3回程度	週に1回程度	週に2～3回程度	週に4回以上
【問 15-4-1】あなた自身の参加するクラブの会合・会議に参加されている頻度はどの程度ですか？	1	2	3	4	5	6	7
【問 15-4-2】クラブが主催するイベント（バザー・スポーツ大会の開催など）への参加はどの程度されていますか？	1	2	3	4	5	6	7
【問 15-4-3】あなた自身の参加するクラブでのスポーツ活動以外のコミュニケーションの場（飲み会・クラブハウスでの交流など）に参加されている頻度はどの程度ですか？	1	2	3	4	5	6	7

	参加していない	年に数回程度	月に1回程度	月に2～3回程度	週に1回程度	週に2～3回程度	週に4回以上
【問 16】あなたが現在、スポーツ以外の趣味・娯楽活動（芸術文化活動・生涯学習など）に参加される頻度はどの程度ですか？	1	2	3	4	5	6	7
【問 17】あなたは現在、ボランティア、NPO、市民活動（まちづくり、高齢者・障害者福祉や子育て、美化、防犯・防災、環境、国際協力活動など）をされる頻度はどの程度ですか？	1	2	3	4	5	6	7
【問 18】あなたが現在、その他の団体（商工会、業種組合、宗教、政治など）活動に参加される頻度はどの程度ですか？	1	2	3	4	5	6	7

記入もれがないか、今一度ご確認ください。お忙しい中、貴重な時間を割いていただきまして、ありがとうございます。ご協力に感謝いたします。